平成12年度　市道四絡30号外１線道路改良工事に伴う

小山遺跡第３地点発掘調査報告書

（第３次発掘調査）

２００２年3月

出雲市教育委員会

平成12年度　市道四絡30号外１線道路改良工事に伴う

小山遺跡第３地点発掘調査報告書

（第３次発掘調査）

２００２年３月

出雲市教育委員会

序

小山遺跡が所在する出雲市四絡地区は、矢野遺跡・大塚遺跡・姫原西遺跡など、出雲市でも有数の集落遺跡の密集地帯として知られています。近年の開発に伴って、発掘調査も増え、しだいに古代四絡地区の様相が明らかになりつつあります。

このたび、市道四絡30号外１線道路改良工事に伴い、小山遺跡第３地点を発掘調査いたしました。その結果、弥生時代から古墳時代初頭にかけてと奈良・平安時代及び中世の遺構・遺物を検出しました。特に、古墳時代初頭に埋まった溝状遺構は、天神遺跡や古志本郷遺跡・下古志遺跡などでも確認された「環濠」と類似しており、貴重な発見と言えます。また、墨書須恵器が検出され、平成６年度（第１次）調査において確認された墨書土師器・ヘラ描き須恵器などと合わせ、古代の人々の暮らしぶりを伺い知るうえでの重要な資料となりました。

これらの成果が、今後の研究資料として広く活用され、歴史の解明と郷土の発展に寄与することを期待するとともに、発掘調査及び本書を発刊するにあたり、ご指導ご協力賜りました関係者のみなさまに心から御礼申し上げます。

平成14年（2002）３月

出雲市教育委員会
教育長　多　久　　博

例　言

1．本書は、出雲市（道路河川課）より依頼を受け、出雲市教育委員会が、平成12年度に実施した、市道四絡30号外１線道路改良工事に伴う、小山遺跡第３地点第３次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査地は次のとおりである。

小山遺跡第３地点（出雲市遺跡地図遺跡番号Ｇ04、地図番号10.11）

出雲市小山町地内（旧四絡ふれあい広場）

3．発掘調査は、平成12（2000）年５月８日に着手し、平成13（2001）年２月２日に終了した。

4．調査組織は次のとおりである。

調査主体　　出雲市教育委員会

事務局　　大田　茂（出雲市教育委員会　文化振興課課長）

調査指導　　田中義昭（島根県文化財保護審議委員）

池淵俊一（島根県教育庁　文化財課　主事）

調査担当者　園山　薫（出雲市教育委員会　文化振興課　嘱託員）

調査補助員　糸賀伸文、勝部真紀、（文化振興課臨時職員）

5．発掘調査、遺物整理、報告書作成においては、以下の方々の協力を得た

発掘調査　吾郷　栄、吾郷要子、板垣将信、大森長一郎、公田悦郎、畑　守隆、福田益之、星野勝義、松田高志、米原信夫、和田昭七、

遺物整理　飯國陽子、吹野初子、河井栄子、岩崎晶美

6．出土遺物の実測は、上記調査員・調査補助員のほか、瀧尻幸平が行った。

7．本書に掲載した遺物写真の撮影は、園山が行った。

8．発掘調査、ならびに報告書作成に当たっては、以下の方々から有益な御指導・助言を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）

松井　章（奈良国立文化財研究所）、平石　充（島根県立博物館）、錦田剛志（同）、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、　内田律雄（同）、松山智弘（同）、松尾充晶（同）、渡部正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

9．石器の石材鑑定は羽木伸幸氏（社会福祉法人千鳥福祉会　嘱託員）にお願いした。

10．挿図中の北は、磁北を指す。従って測量法による第Ⅲ座標系のＸ軸より、７°55″西の方向を指す。レベル高は海抜高を示す。

11．本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物、ＳＡ：柱列、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝、

12．土器実測図のうち、アミかけしたものは赤色塗彩を示す。

13．本書の執筆・編集は園山が行った。

14．出土遺物及び実測図、写真等の記録は出雲市教育委員会において保管している。

本　文　目　次

序
例　言
本文目次
挿図目次
図版目次

第１章　位置と環境 …… 1
第２章　調査の経緯 …… 3
第３章　調査の結果 …… 6
　第１節　調査の概要 …… 6
　第２節　遺構と遺物 …… 7
第４章　まとめ ……34
　出土遺物観察表 ……36

　図　版 ……図版１～29

挿　図　目　次

第１図　小山遺跡第３地点周辺の遺跡分布図…２
第２図　小山遺跡第３地点調査配置図 ……３
第３図　遺構配置図 ……４．５
第４図　土層図 ……７
第５図　ＳＡ０１実測図 ……８
第６図　ＳＢ０１実測図 ……８
第７図　ＳＢ０２実測図 ……９
第８図　ＳＢ０２出土遺物実測図 ……10
第９図　ＳＢ０３実測図 ……10
第10図　ＳＥ０１実測図 ……11
第11図　ＳＥ０１出土遺物実測図 ……11
第12図　ＳＫ０１実測図 ……12
第13図　ＳＫ０１出土遺物実測図 ……13
第14図　ＳＫ０１出土木製品実測図 ……14
第15図　ＳＫ０２実測図 ……15
第16図　ＳＫ１０実測図 ……16
第17図　ＳＫ１０出土遺物実測図 ……16
第18図　ＳＫ１７実測図 ……17
第19図　ＳＫ１８実測図 ……18
第20図　ＳＫ１８出土遺物実測図 ……19
第21図　ＳＫ１９実測図 ……20
第22図　ＳＤ０３．０４実測図 ……21
第23図　ＳＤ０８．０９実測図 ……22
第24図　ＳＤ１０実測図 ……23
第25図　ＳＤ１２．１３実測図 ……24
第26図　ＳＤ１５実測図 ……25
第27図　溝状遺構土層図 ……26
第28図　SD04.09.12.13.15.18出土遺物実測図…27
第29図　ＳＤ２３実測図 ……28
第30図　ＳＤ２３出土遺物実測図1……30
第31図　ＳＤ２３出土遺物実測図２ ……31
第32図　遺構外出土遺物実測図1……32
第33図　遺構外出土遺物実測図２ ……33
第34図　墨書須恵器実測図 ……33

図　版

図版１　調査区全景（上から）
図版２　SE01.SD03.23.SK18（上から）
図版３　調査区南半分（上から）
図版４　調査区北半分（上から）
図版５　ＳＢ０１（北から）
ＳＢ０２（東から）
ＳＢ０２．ＳＤ１２．１３プラン(東から)
図版６　ＳＥ０１遺物出土状況
ＳＥ０１（南から）
SE01.SD03.20.21.22
図版７　ＳＫ０１
ＳＫ０１遺物出土状況
ＳＫ０１・０２（南から）
図版８　ＳＫ１０遺物出土状況
ＳＫ１８遺物出土状況
ＳＫ１８（北から）
図版９　ＳＤ０１
ＳＤ０１．０２
ＳＤ０３（北から）
図版10　ＳＤ０４（南から）
黒色土落ち込み（北から）
図版11　ＳＤ０４土層
ＳＤ０５．０６（南から）
図版12　４Ｇｒより北調査状況
ＳＤ０８．０９（南から）
図版13　ＳＤ１８．１９（西から）
ＳＤ０８．０９．１１（西から）
図版14　ＳＤ１２（北から）
ＳＤ１２土層
ＳＤ１３土層
図版15　ＳＤ１５検出状況
ＳＤ１５土層
ＳＤ１５（東から）
図版16　ＳＤ２３検出状況　（南から）
ＳＤ２３調査状況
図版17　ＳＤ２３遺物出土状況
ＳＤ２３遺物出土状況
図版18　ＳＤ２３土層
ＳＤ２３（南から）
図版19　調査区（南から北を望む）
調査区南側（市街を望む）
図版20　ＳＢ０２出土遺物
ＳＥ０１出土遺物
図版21　ＳＫ０１出土遺物
図版22　ＳＫ１０出土遺物
ＳＫ１９出土遺物
ＳＤ０９出土遺物
ＳＤ１５出土遺物
図版23　ＳＫ１８出土遺物
図版24　ＳＤ２３出土遺物
図版25　ＳＤ２３出土遺物
図版26　ＳＤ２３出土遺物
図版27　溝内出土遺物
遺構外出土遺物（墨書須恵器）
図版28　遺構外出土遺物
図版29　遺構外出土遺物（製塩土器）
遺構外出土遺物（陶磁器）

第１章　位置と環境

小山遺跡は、出雲市中心部の北側に隣接する四絡地区に所在する。同地区は、近年ますます都市化が進み、発掘調査も急増してきている。小山遺跡は、弥生時代の拠点集落として知られる矢野遺跡や、大塚遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡などとともに、「四絡遺跡群」を形成する遺跡のひとつである。

「四絡遺跡群」の中核となる矢野遺跡は、縄文時代後・晩期から始まる集落遺跡で、矢野第３地点では弥生時代後期に吉備地方から搬入された特殊土器などが発見されている。小山遺跡は矢野遺跡に付随して弥生時代中期中葉から造営されてきた。

本調査地は、出雲考古学研究会の調査により地点分けされた小山遺跡第３地点にあたる[1]。旧神戸川の下流域に形成された自然堤防上に立地しており、小山遺跡の北東部分にあたる。旧河道の右岸に形成された微高地上に発展した遺跡である。東は大塚遺跡に接し、、旧河道の左岸に小山遺跡第１．第２地点を見る。本遺跡ではこれまでの調査で、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡であることが分かっている。

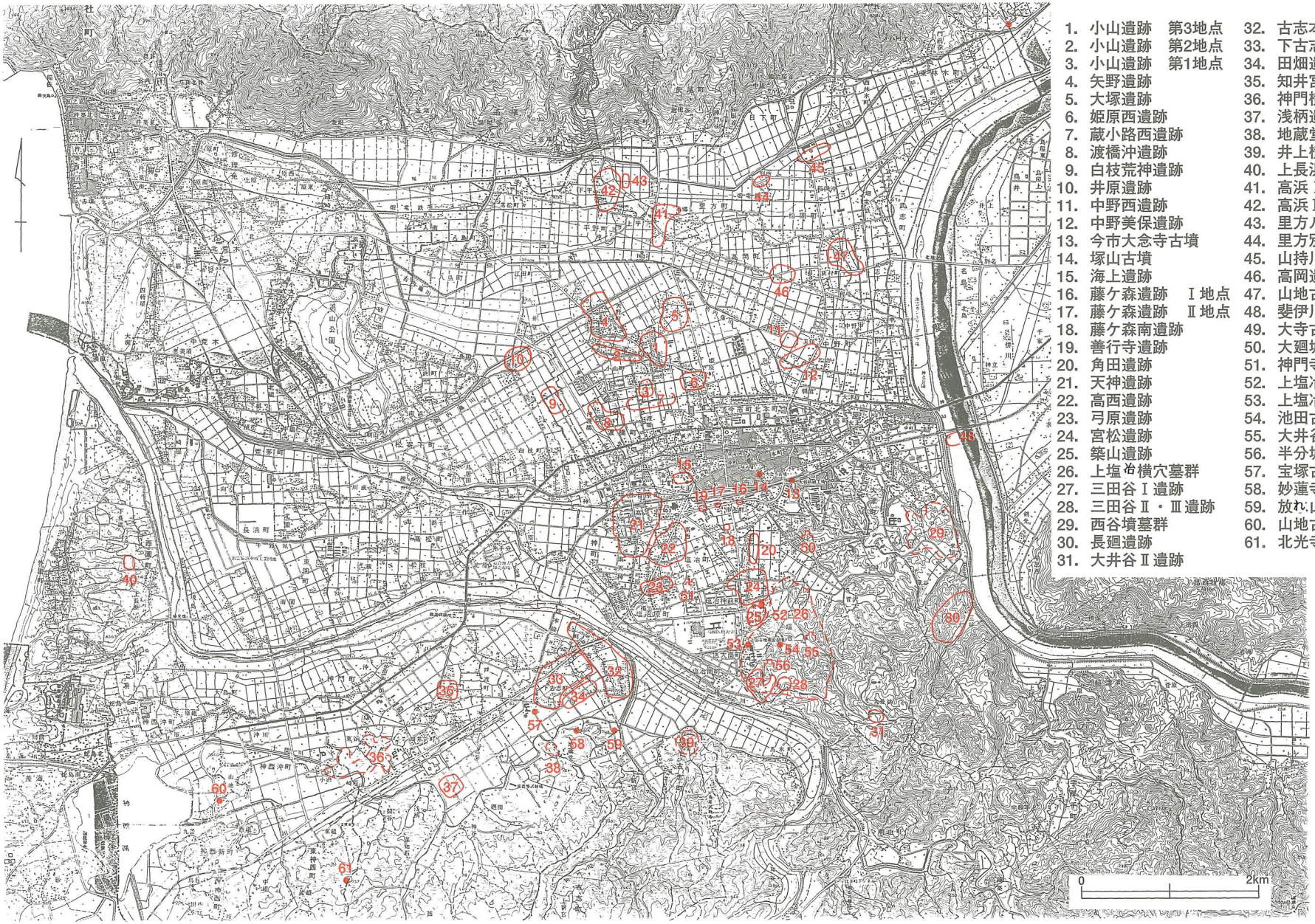
縄文時代、「神門の水海」と呼ばれた潟湖の縁辺部に集落が出現し始め、後・晩期になって、矢野遺跡や蔵小路西遺跡・善行寺遺跡など、平野の中心部でも本格的に発展してくる。縄文時代後・晩期の遺跡からは、弥生時代前期の遺物が出土しており、連続して遺跡が存続していたことが窺える。

弥生時代中期以降、矢野遺跡をはじめ平野部の集落は急増し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの拠点集落の出現を見る。小山遺跡第３地点では、平成９年度の調査（第２次）で、弥生時代中期後葉から後期前葉の「環濠」と思われる溝状遺構が確認されている[2]。後期後半に至って、出雲平野を見下ろす西谷丘陵に四隅突出型墳丘墓が築かれるほどの発展を見るが、終末期から古墳時代初頭にかけて、ほとんどの遺跡は終息してしまう。その原因は未だ解明されていない。古墳時代前期の平野中心部は空白期であり、縁辺部でわずかに遺跡が確認されるのみである。古墳も北山山麓に大寺古墳、神西湖東岸に山地古墳などが築かれる程度に過ぎない。これは、畿内中央政府との関係が影響しているものと考えられる。

古墳時代中・後期になると、平野部の集落も徐々に再興していき、出雲地方最大の前方後円墳である今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳などの大型古墳が築かれるようになり、終末期には上塩冶横穴墓に代表される横穴墓が多数分布するようになる[3]。

律令時代、平野の各地で遺跡が確認されている。古志本郷遺跡では近年の調査で、「神門の郡家」跡に比定される建物跡が発見されている。平野の西には、当時西流していた斐伊川と神戸川による「神門水海」が広がっており、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、本遺跡付近は「神門郡八野郷」に比定されている。平成６年度の調査（第１次）で、墨書土器やヘラ描き土器が確認され、同書記載の「八野郷庁」との関連も指摘されている。

中世に至って、蔵小路西遺跡からは12～15世紀の朝山氏の居館跡と考えられる遺構が確認され[4]、また、矢野遺跡では14～15世紀の屋敷跡が確認されており、四絡地区は中世以降も繁栄してたようである。



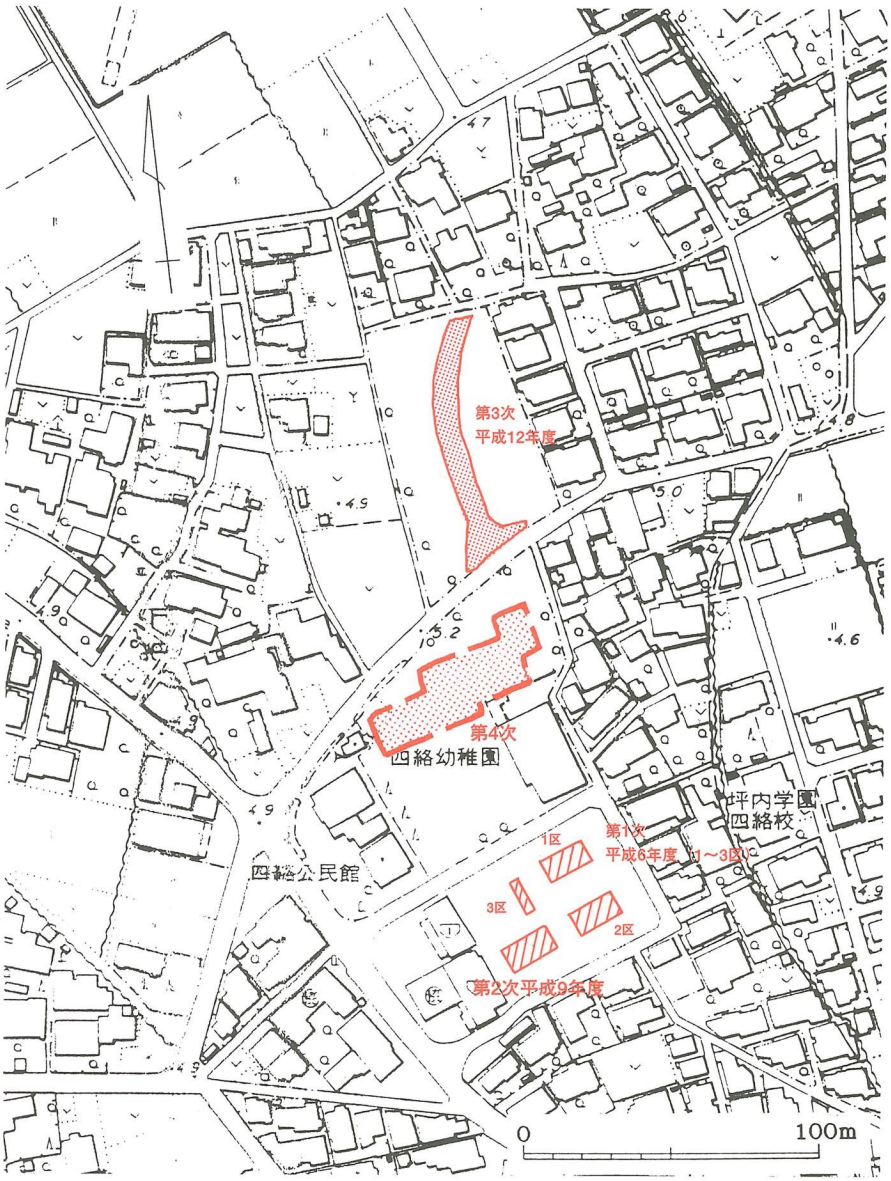
1. 小山遺跡　第3地点
2. 小山遺跡　第2地点
3. 小山遺跡　第1地点
4. 矢野遺跡
5. 大塚遺跡
6. 姫原西遺跡
7. 蔵小路西遺跡
8. 渡橋沖遺跡
9. 白枝荒神遺跡
10. 井原遺跡
11. 中野西遺跡
12. 中野美保遺跡
13. 今市大念寺古墳
14. 塚山古墳
15. 海上遺跡
16. 藤ケ森遺跡　Ⅰ地点
17. 藤ケ森遺跡　Ⅱ地点
18. 藤ケ森南遺跡
19. 善行寺遺跡
20. 角田遺跡
21. 天神遺跡
22. 高西遺跡
23. 弓原遺跡
24. 宮松遺跡
25. 築山遺跡
26. 上塩冶横穴墓群
27. 三田谷Ⅰ遺跡
28. 三田谷Ⅱ・Ⅲ遺跡
29. 西谷墳墓群
30. 長廻遺跡
31. 大井谷Ⅱ遺跡
32. 古志本郷遺跡
33. 下古志遺跡
34. 田畑遺跡
35. 知井宮多聞院遺跡
36. 神門横穴墓群
37. 浅柄遺跡
38. 地蔵堂横穴墓群
39. 井上横穴墓群
40. 上長浜貝塚
41. 高浜Ⅰ遺跡
42. 高浜Ⅱ遺跡
43. 里方八石原遺跡
44. 里方別所遺跡
45. 山持川川岸遺跡
46. 高岡遺跡
47. 山地古墳
48. 斐伊川鉄橋遺跡
49. 大寺古墳
50. 大廻城（向山城）
51. 神門寺境内廃寺
52. 上塩冶築山古墳
53. 上塩冶地蔵山古墳
54. 池田古墳
55. 大井谷古墳
56. 半分城
57. 宝塚古墳
58. 妙蓮寺山古墳
59. 放れ山古墳
60. 山地古墳
61. 北光寺古墳

第１図　小山遺跡第３地点周辺の遺跡分布図

第２章　調査の経緯

平成11年（1999）８月31日付で、出雲市長（道路河川課）より、市道四絡30号外１線道路改良工事予定地内の埋蔵文化財試掘調査の依頼があった。工事予定地は周知の遺跡である小山遺跡第３地点の範囲内であったため、平成11年（1999）９月21日　出雲市教育委員会が現地の試掘調査を実施した。その結果、ＮＨＫの旧放送所鉄塔基礎により、部分的に遺跡が破壊されている箇所があるものの、工事予定地全域において、埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。

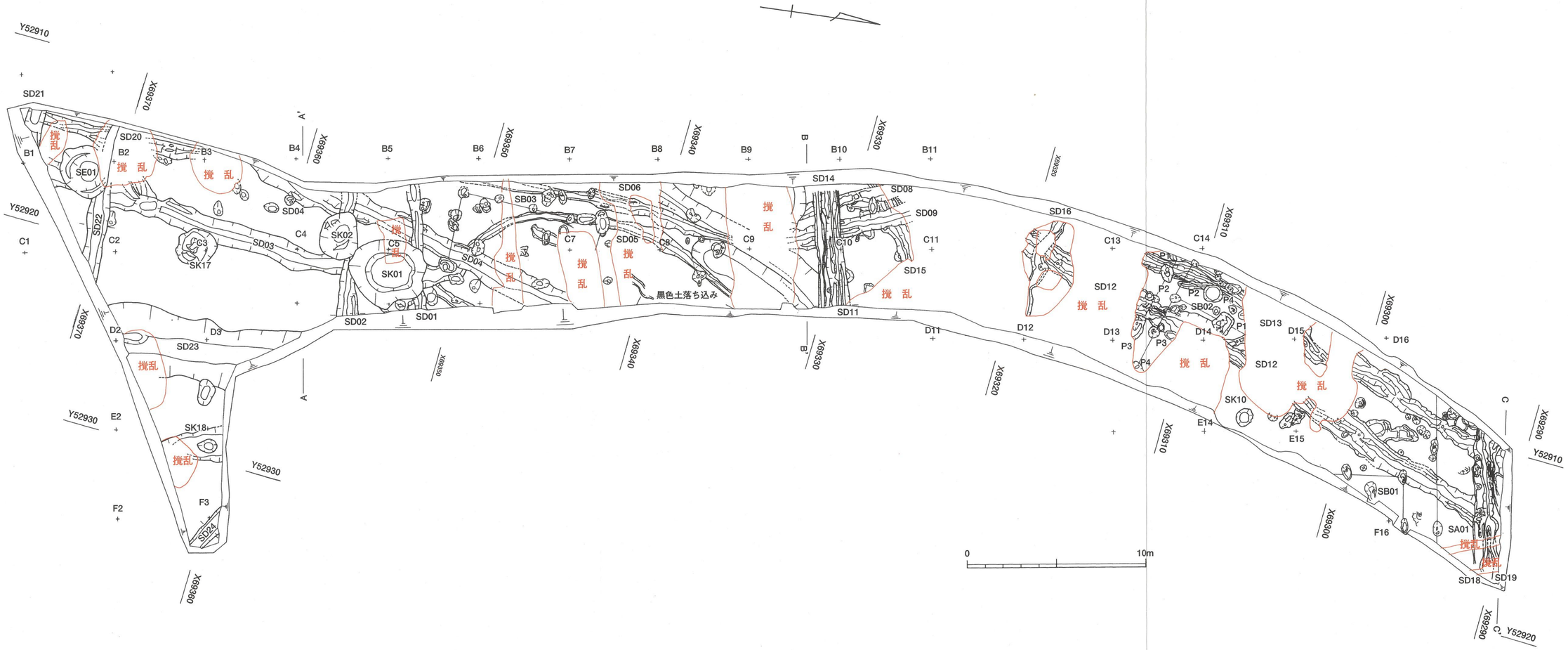
平成12年（2000）３月21日付で、出雲市長（道路河川課）より、市道四絡30号外１線道路改良工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査の依頼があった。調査範囲は720㎡（８×90m）であるが、本調査地は公園（四絡ふれあい広場）として使われていたため、南側に桜の古木が植わっており、調査に支障をきたすことが考えられた。しかし、この桜は他の公園に移植する計画があったため、道路河川課と協議し、南側部分（160㎡）については桜の移植後の10月以降に調査することになった。



第２図　小山遺跡第３地点調査配置図（Ｓ＝1：2500）

平成12年（2000）５月８日より、南側部分を除いた560㎡の調査を実施し、平成12年（2000）９月８日に終了した。その後、桜の移植作業も11月までに終了したため、南側部分（160㎡）の調査を平成12年（2000）12月11日より実施し、平成13年（2001）2月2日に終了した。これにより、本工事予定地内の発掘調査は終了し、島根県教育委員会と協議の上で、工事着手の運びとなった。

なお、平成13年度も出土遺物の整理作業を継続し、平成14年（2002）３月に本書を発刊するに至っている。



第３図　遺構配置図（S=1：200）

第３章　調査の結果

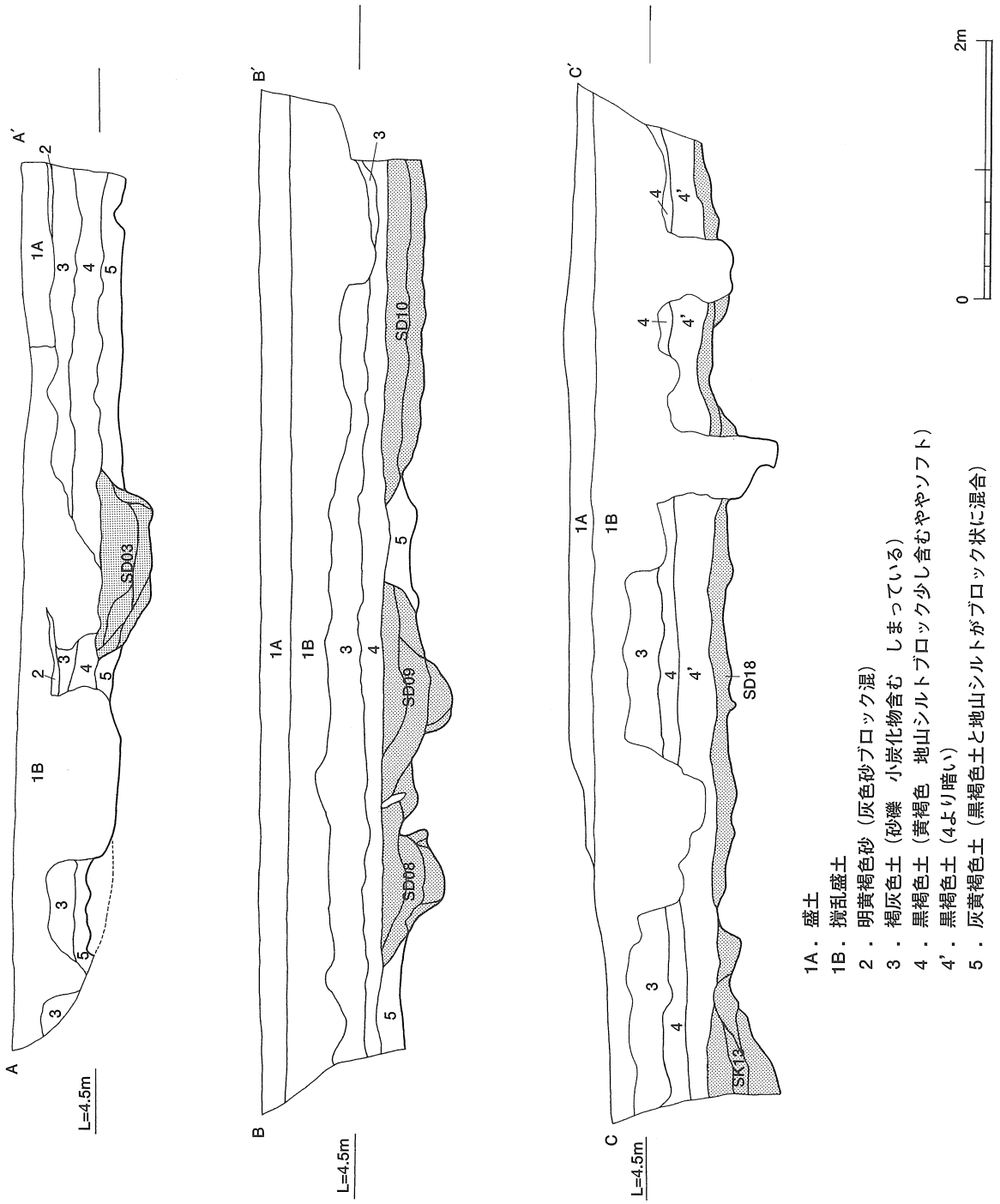
第１節　調査の概要（第３～４図）

本調査地は道路建設予定地のため、幅約８ｍ、長さ約90ｍの調査範囲で、南北方向を北に向けて右にカーブを描く形状を成している。南の調査区外に設置したＡ１グリッド杭を基準に、５ｍメッシュでグリッド杭を設置し、北に向けてＦ17グリッドまで設定した。盛土及び攪乱土が厚く、深さ約１ｍまで重機によって掘り下げた。その後包含層を徐々に掘り下げ、遺構検出に努めた。

本調査地は戦後、NHKの旧ラジオ放送所が建っていた場所で、その後、放送所が北約200ｍの位置に移転した後、四絡地区の公園（四絡ふれあい広場）として整備され、市民に利用されていた。放送所鉄塔の建設や移転時の工事などにより、遺構面の約４割近くが攪乱を受けていた。そのため、検出した遺構が破壊されていたり、つながりがはっきりしない部分がある。特に、７～12グリッドにかけては放送所施設の中心部であったため、鉄塔の基礎部や攪乱により、遺構面のほとんどが破壊されていた。また、１～３グリッド内では、植えられていた桜の根のために攪乱を受けていた箇所がある。

土層の堆積状況は、調査区全域で変化はなく、基本的に１～５層まで分層され、黄褐色シルトの地山面に至る。１層はラジオ放送所移転後、公園として整備したときの盛土で、その下には放送所鉄塔建設時及び撤去時の攪乱土が入っている。この攪乱土の中にはコンクリ塊や石礫などが混在しており、その除去に困窮した。３層は旧耕作土で、近世からラジオ放送所開設までのものと思われる。黄褐色地山シルトのブロックを含む４．５層が遺物包含層であるが、４層は、調査区全域でほぼ同レベルで平面的に堆積している。須恵器・土師器破片を出土する。耕作土の跡と考えられ、この時点でかなり平面的に削平されたと考えられる。５層が奈良・平安時代の遺物包含層である。４層と同様地山シルトのブロックを混合するが、４層より砂礫が少なくソフトである。ほとんどの遺構はこの５層に掘り込まれている。上述の様に、かなりの部分が攪乱で破壊されているが、掘立柱建物３棟、井戸１基、土坑19、溝状遺構24、他、多数のピット等を検出した。溝状遺構は大別して、東西方向に走るものと、南北方向に走るものとがあり、さらに同形状の２つの溝が平行する傾向が見られた。Ｃ２～Ｄ３グリッドにかけて検出したＳＤ２３は、古墳時代前期前葉に埋まった「環濠」の様相を呈する溝である。Ｄ14グリッドでは、攪乱を受けているものの、奈良・平安期の遺物を多く検出した。また、10グリッド以北では、13～15グリッドを中心に製塩土器破片を多く検出した。黄褐色シルトの地山レベルは標高4.3ｍ～4.1ｍで、北西方向に向かって緩やかに下っている。検出した遺構の密度も北に向かって低くなっており、南の微高地から北に向かって低地に至る地形と関連している。地山上の遺物包含層からは、須恵器・土師器など奈良時代から平安時代にかけての遺物が主に出土している。

平成12年10月より、本調査区から南20ｍにある四絡幼稚園の改築工事に伴う発掘調査（第４次）が始まり、年末にかけて調査が並行する期間があった。第４次調査区においても遺構・遺物の検出状況は類似しており、第１次・２次調査区とともに遺跡が連続するものであることが確認された。特に、第４次調査区の東部分ではＳＤ２３に続くと考えられる溝状遺構が検出されている。



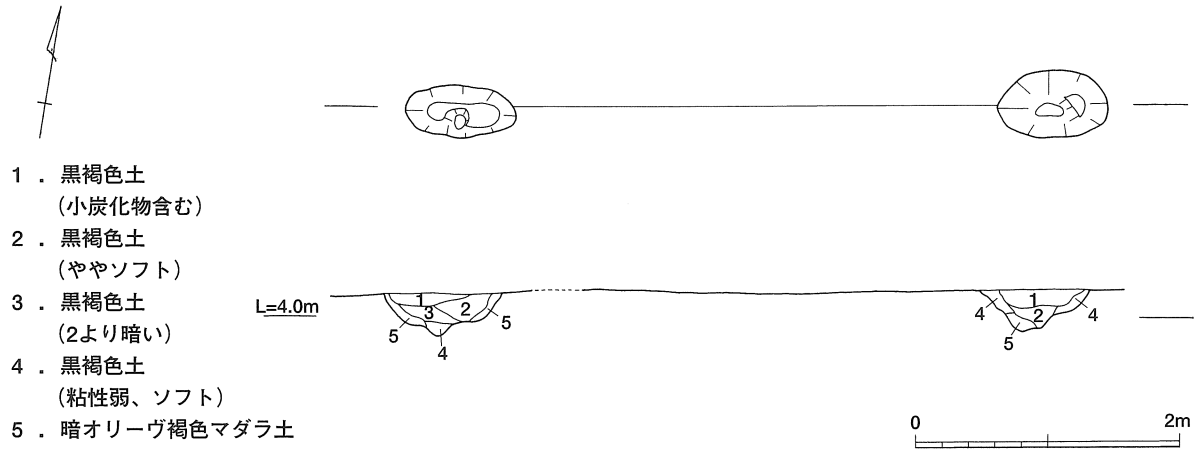
第４図　土層図（Ｓ＝1：50）

第２節　遺構と遺物

１．柱列

ＳＡ０１（第５図）

調査区の北端近く、16グリッドで検出した、２穴からなる東西方向の柱穴列である。柱間は約4.5mを測るが、西の調査区外へ展開する可能性もある。東西軸はＮ－81°－Ｅを指向する。約２ｍ北には溝状遺構であるＳＤ１８．１９が平行して走っていることから、これらの溝に関係するものと思われる。また、南に位置するＳＢ０１の東西軸と方向を同じくし、その距離は1.8mである。ＳＤ１８．１９とＳＢ０１のほぼ中間に位置することから、柵の可能性が考えられるが、２穴のみであるため断定は出来ない。覆土からは須恵器と土師器の破片がわずかに見られるのみで、ＳＤ１８．１９、ＳＢ０



第５図　SA01　実測図（Ｓ＝1：60）

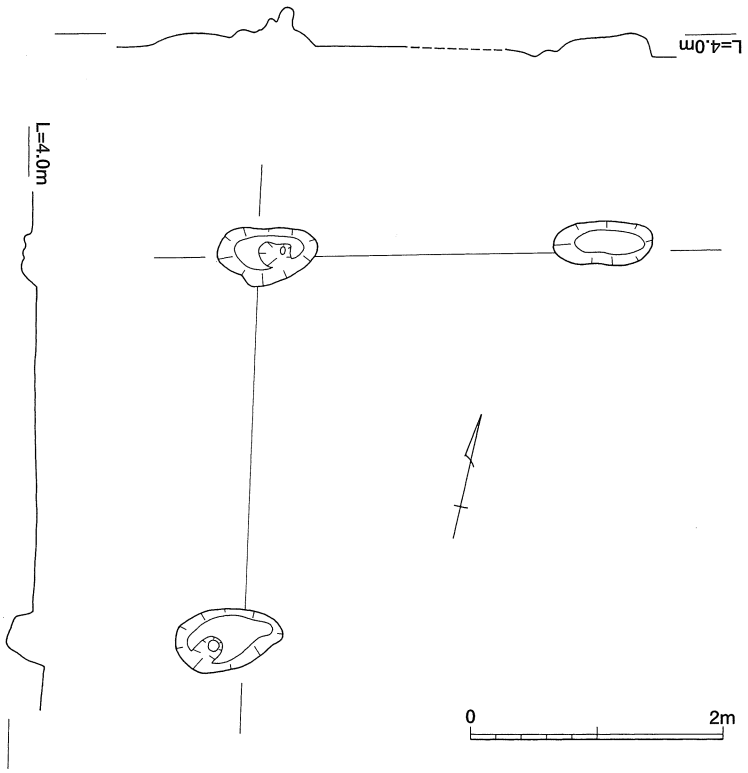
１と同時期と考えるが、決定する資料はない。

２．掘立柱建物（第６～９図）

ＳＢ０１（第６図）

ＳＡ０１の1.8m南に位置する掘立柱建物である。約3mを１間とする３穴のピットを検出した。長径0.8～0.9m、短径0.4～0.6m、深さ40～50㎝を測る楕円形のピットで、ＳＡ０１のピットに類似する。１間×１間分を検出したが、それ以上に調査区外に展開する可能性がある。東西を軸とした場合、Ｎ－81°－Ｅを指し、方向としてもＳＡ０１と同一である。ＳＡ０１と同軸のピット配置を呈することから、ＳＡ０１と同時期の建物と考えられる。

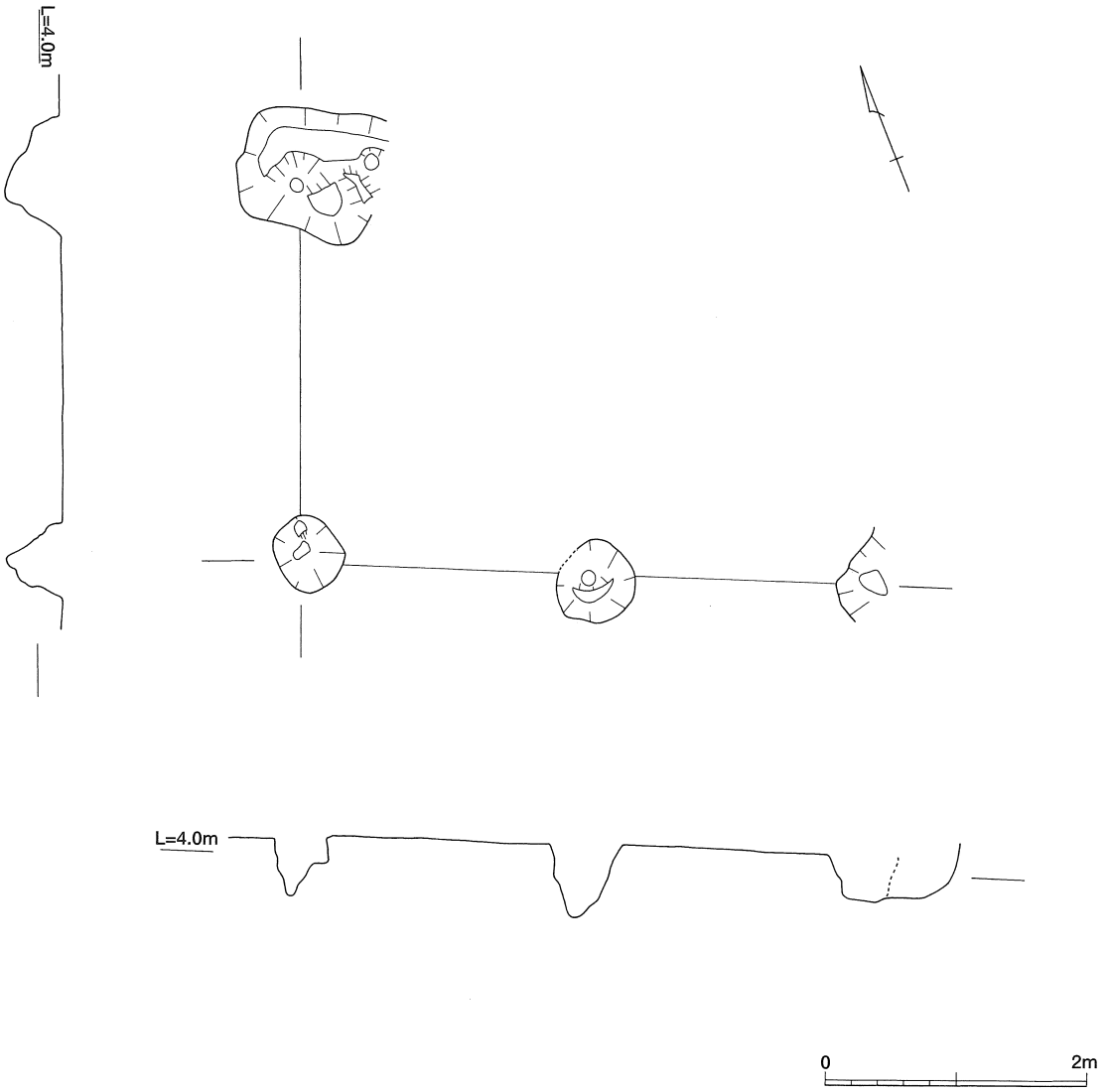
遺物は須恵器と土師器の破片、赤色塗彩の土師器破片が少量出土していることから、奈良・平安時代の建物と考えられる。



第６図　SB01実測図（S=1：60）

ＳＢ０２（第７図）

13グリッドで検出した掘立柱建物である。東西方向に２間（4.4m）、南北方向に１間（3m）を測る。攪乱に切られるため、正確な規模は掌握できないが、２間×１間以上の建物と思われる。南北を軸とすると、Ｎ－20°－Ｅを指向し、ＳＢ０１・ＳＡ０１より27°東に振っている。外側約90㎝に東西方向1.6m、南北3.0m間隔でピットが巡る。さらに西90㎝にピットが並んでおり、これらは底部分のピットの可能性も考えられるが、攪乱部で不明な部分もある



第７図　SB02実測図（Ｓ＝1：60）

ため、ＳＢ０２としては２間×１間の建物とした。、ピットからは須恵器と土師器の破片が少量出土している。

遺物（第8図）１は製塩土器の破片である。厚手の器壁で口縁端部内側に面を作り、内外面とも指ナデの成形痕が残る。２は須恵器坏の底部で、底面は回転糸切り離しである。３は拳大の礫で、方形に加工した痕が見られる。一部焼成を受けて黒変している部分がある。１．２は８・９世紀代の所産であることから、ＳＢ０２は奈良・平安時代の建物跡と考えられる。

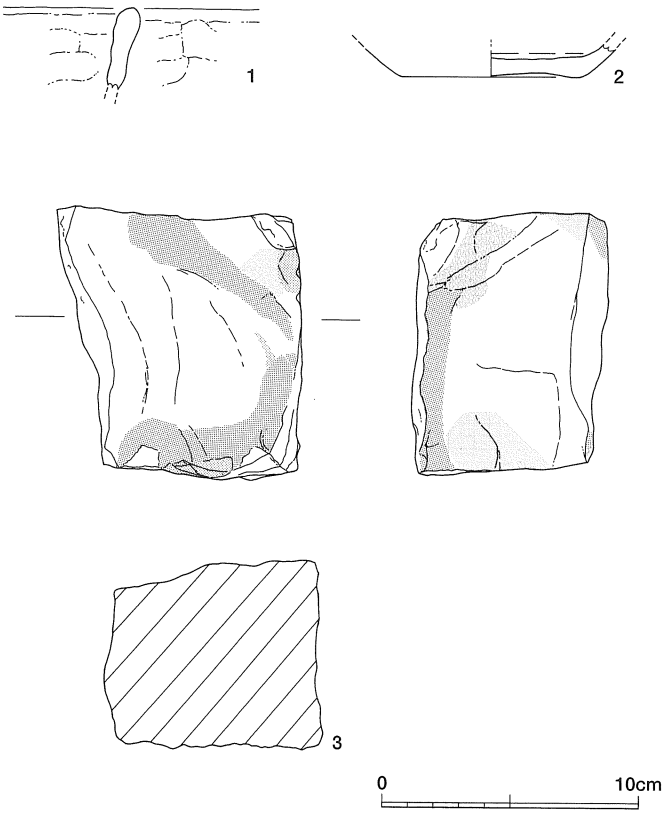
ＳＢ０３（第９図）

5・6・7グリッドで検出した掘立柱建物である。不整円形のプランを呈し、深さ20～40㎝のやや小型の柱穴である。東側と北側に広がる攪乱のために、対応するピットが見あたらないが、1間約2ｍを測り、南北４間（８ｍ）×東西2間（４ｍ）以上の規模になると思われる。南北を軸とすると、Ｎ－４°－Ｅを指向する。ピット内からは土師器の小片がわずかに出土するのみで、時期を特定するのは難しい。ＳＤ０４を切ることから、おそらく奈良・平安から中世にかけての建物と考えられる。

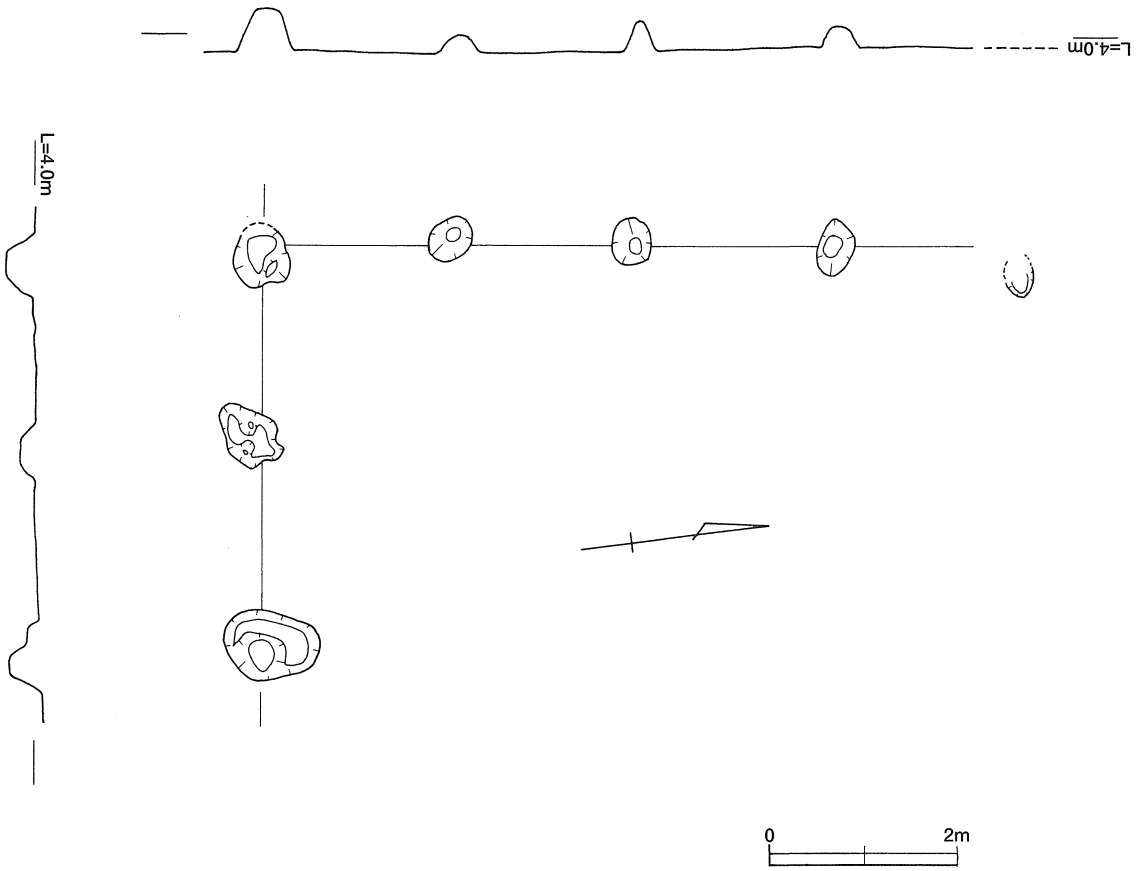
3．井戸

ＳＥ０１（第10図）

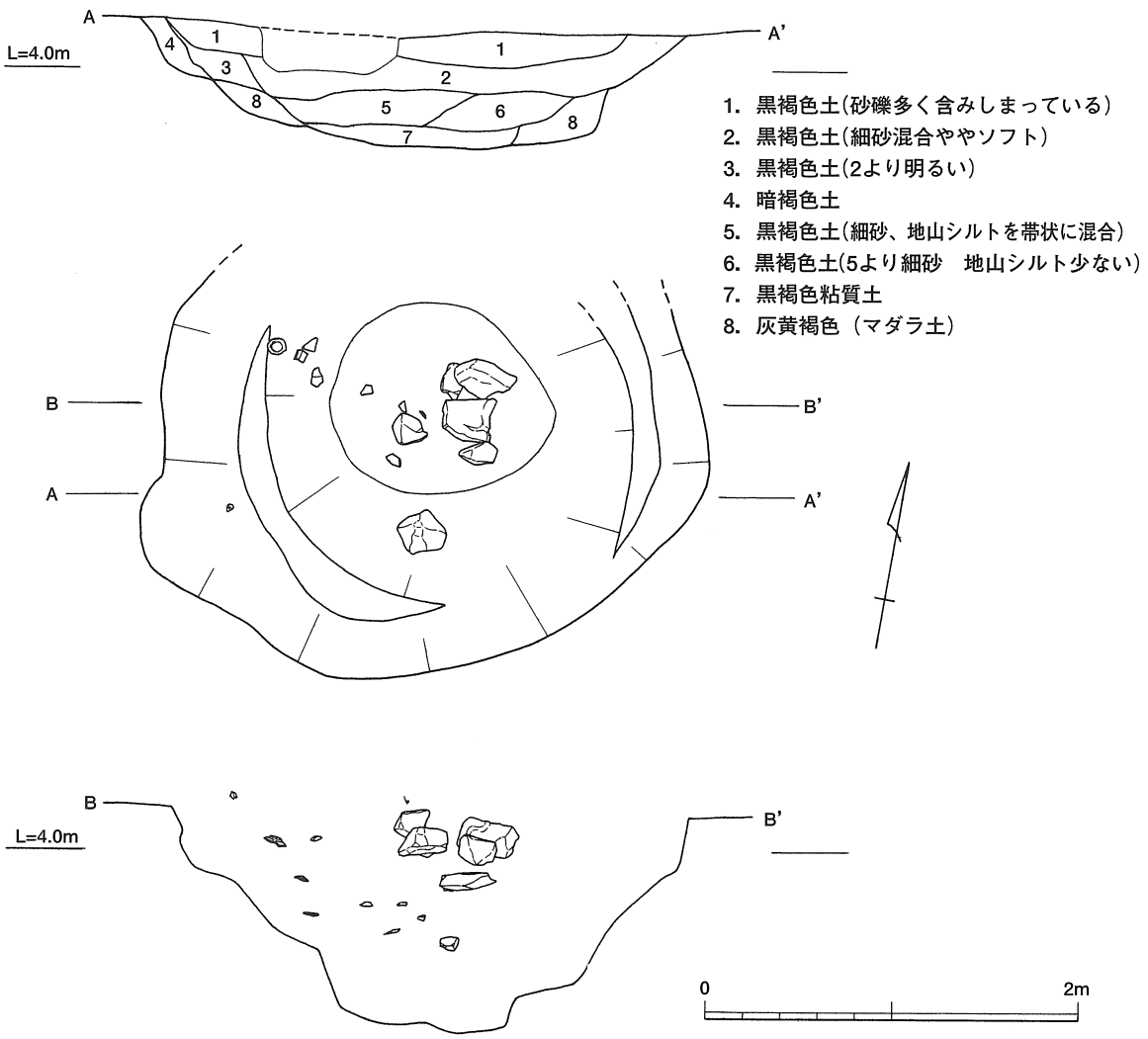
調査区の南側、１グリッドで検出した井戸である。径約3.0ｍのほぼ円形プランを呈し、深さ1.2ｍを測る。人頭大の礫が中央部の上層でかたまって数個出土しており、廃棄後に埋まったと考えられる。鉢状の堀り方を成し、漏斗状にやや落ち込んだ中心部から湧水することから、この水溜部に何らかの施設があった可能性が考えられる。土層断面の観察からもその存在が窺えるが、井戸側等は検出しなかった。覆土からは中世末期と思われる土師器が上層から数点出土している。井戸廃絶後に埋まったものと思われ、４．５グリッドにあるＳＫ０１．０２と同時期の遺構と考えられる。



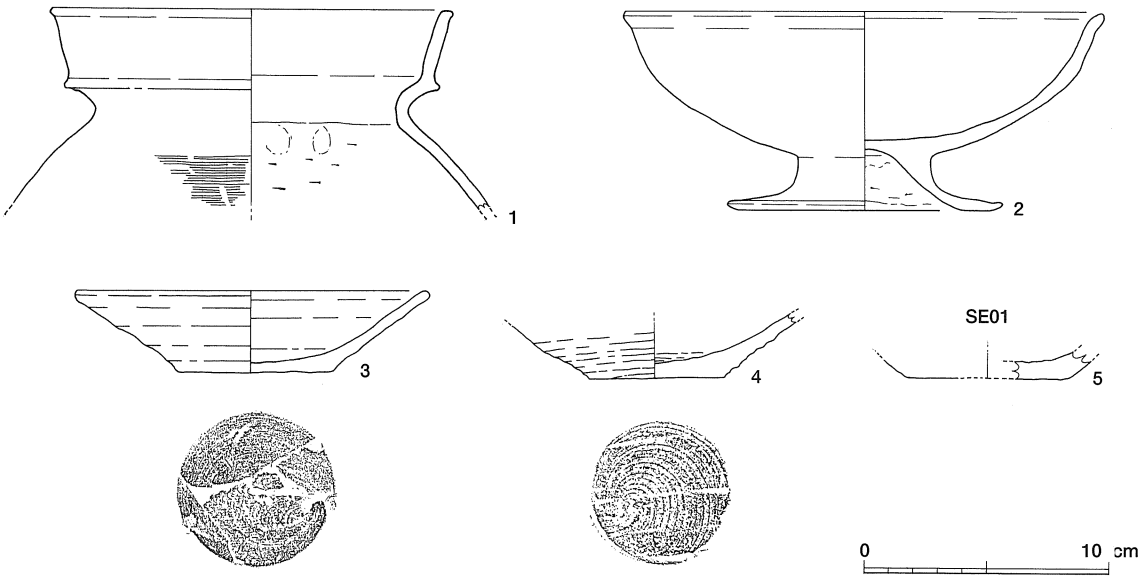
第８図　SB02出土遺物実測図（S=1：3）



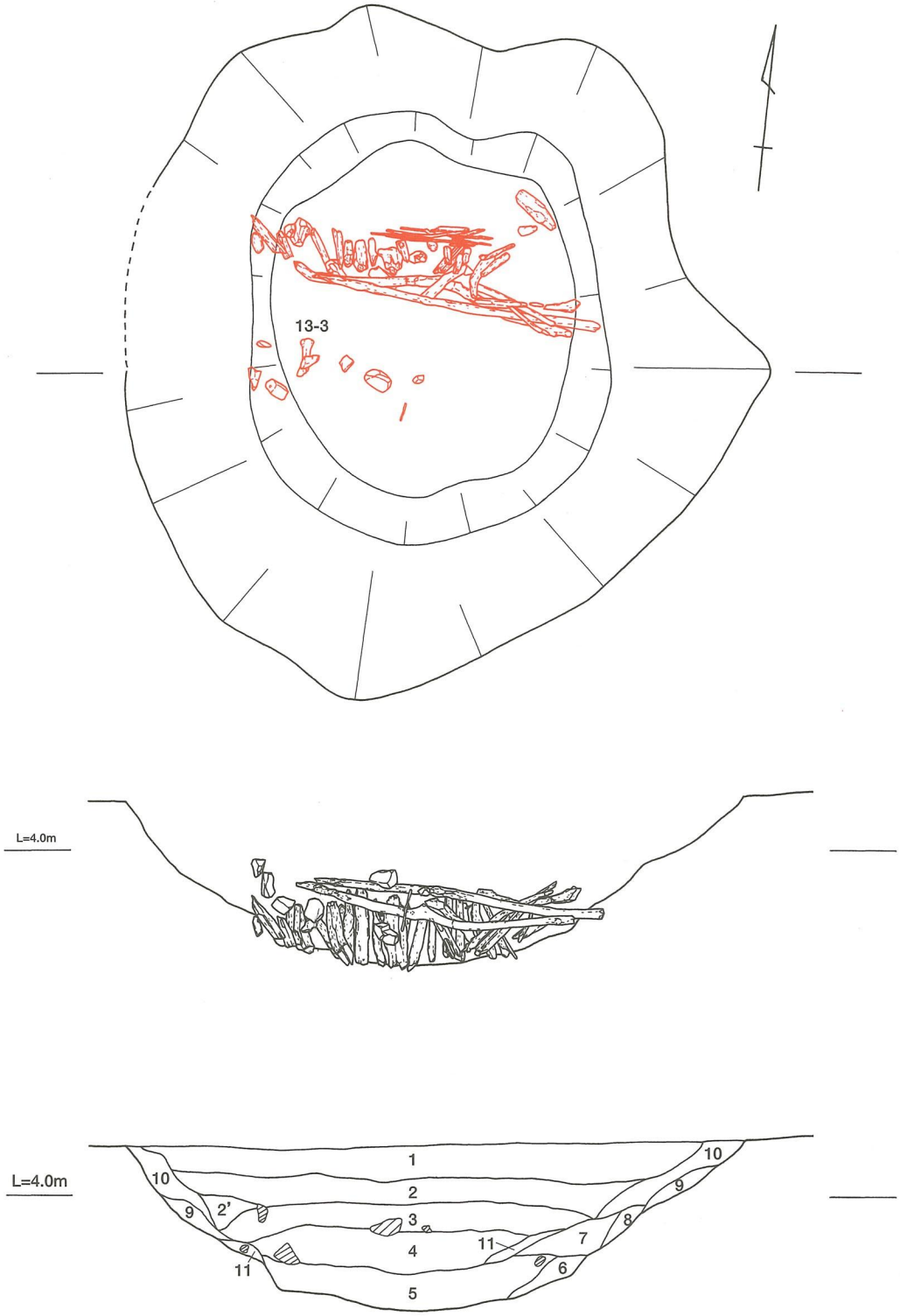
第９図　SB03実測図（S=1：80）



第10図　SE01　実測図（S=1：40）



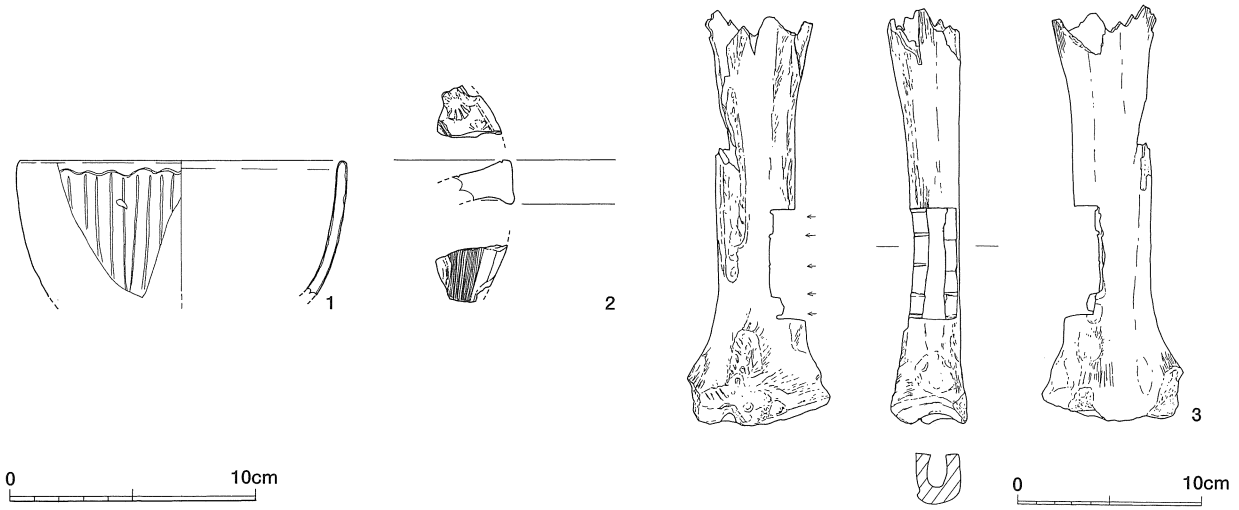
第11図　SE01出土遺物実測図（S=1：3）



1．黒褐色土（砂礫含む　固い）
2．黒褐色土（1より、ややソフト）
2'．黒褐色土（2より、明るくソフト）
3．黒褐色土（粘性中　ソフト）
4．オリーヴ黒色粘質土（腐蝕植物片含む）
5．黒色粘質土（木片少し含む　ソフト）
6．黒褐色土（やや砂質）
7．黒褐色土（粘性中ソフト）
8．黒褐色土（7よりやや砂質）
9．暗灰黄色砂質土
10．灰黄褐色土（地山シルトブロック含む）
11．暗オリーヴ褐色土（マダラ土）

0　2m

第12図　SK01実測図（S=1：40）



第13図　SK01出土遺物実測図（S=1：3　3はS=1：4）

ＳＥ０１出土遺物（第11図）

１は複合口縁の甕で、口縁端部に平坦面を持つ。外面は横方向の刷毛目、内面は頸部以下に横方向の削りを施す。頸部に弱い指頭痕が認められる。草田７期に当たるものと考えられる。２も草田７期に相当すると思われる土師器の低脚坏で、坏部は内湾して立ち上がり、端部は丸く収めて緩く外反する。内面にはミガキを施したような痕が見られる。脚部はやや裾広がり気味に開く。３～５は土師器の坏である。精製された土を用い、ロクロ成形時のヨコナデ痕がよく残っている。底部は回転糸切り離しで、体部は直線的に開き、器高が低い。３は16世紀後半と考えられ、姫原西遺跡Ｃ区３号墓出土の土器に類似する[4]。４は中世末、５は15～16世紀代の所産と考えられる。

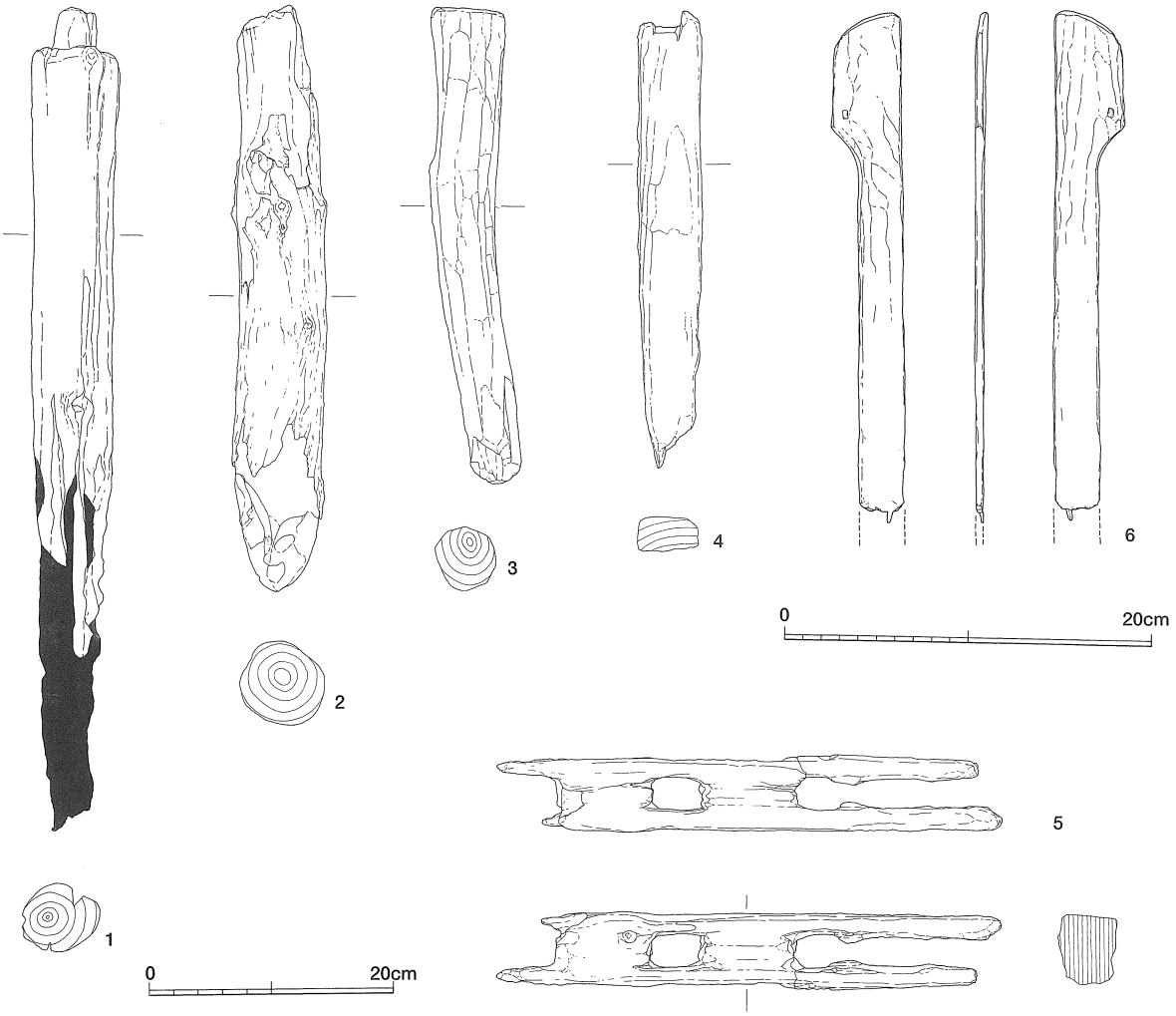
このうち１．２は弥生時代終末から古墳時代初頭の古式土師器である。下層からの出土ではあるが、近くで検出したＳＤ28に同時期の遺物が見られることから、混入と考えられる。下層からは須恵器・土師器の破片が多く出土しており、ＳＥ０１は16世紀後半には埋没したものと考えられる。

４．土坑（12～21図）

ＳＫ０１（第12図）

Ｃ４．５グリッドで検出した土坑で、径3.5m～4.0mの不整円形プランを呈し、深さ約1mを測る。東西方向に平行して走るＳＤ０１．０２を切って掘られている。中層から下層に至るレベルで馬または牛の骨と思われる骨が出土しており、廃棄時の祭祀において使用された可能性がある。底面に杭が打ち込まれ、自然木・加工木材を横木として使用した柵（しがらみ）状の施設が構築されていた。柵状の施設の上面まで４．５層の粘質土が堆積しており、廃棄後１～３層の黒褐色土が平準に埋まったものと考えられる。井戸枠等は検出されなかった。荒砂層まで至り湧水するが、井戸とは考え難い。おそらく、湧き水を溜めながら柵（しがらみ）状の部分で水を汲み上げ、配水したものと考えられる。

覆土からは、土師器の破片とともに青磁椀の破片が若干出土している。中世の水溜配水用の土坑と考えられる。

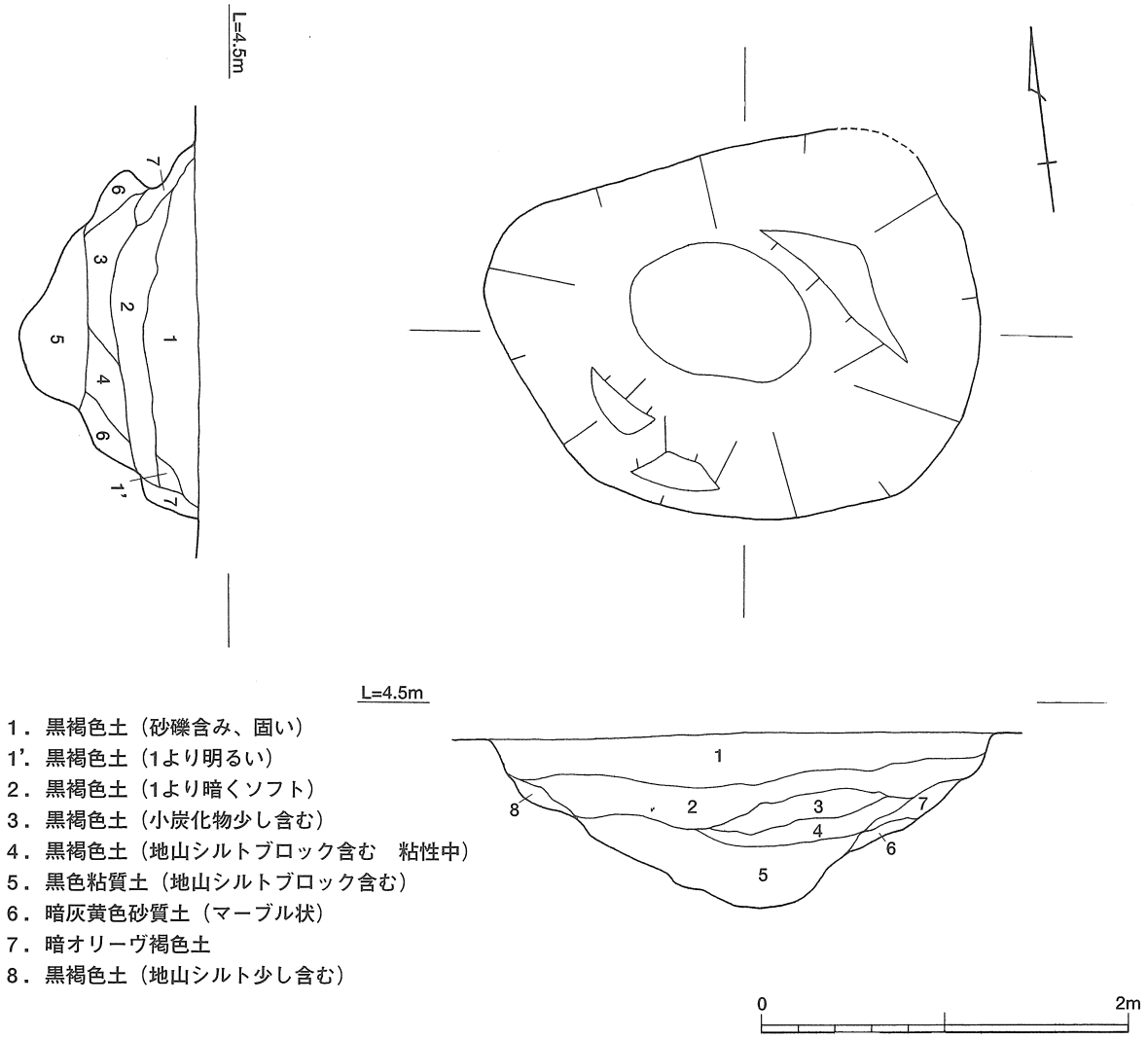


第14図　SK01出土木製品実測図（S=1：6　6はS=1：4）

ＳＫ０１出土遺物（第13.14図）

13—1は線描きの蓮弁文をもつ青磁椀の破片である。**13—2**は壺または鉢の口縁部破片で、上面に菊花文様のスタンプ文が施される。**13—3**は骨材を採取した、牛または馬の大腿骨と考えられる。遺構の中央部、棚状施設の内側４層（オリーブ粘質土）から出土した。骨の中央部に長さ６㎝、深さ1.5㎝にわたって、鋸状工具で切り取った痕が見られる。内側に３ヶ所の切れ込み痕があることから、４個（または４回）分を切り取ったものと思われる。切り取られた部分は「U」字形を呈し、製品は不明であるが、武具の材として使用されたものと考えられる。鎌倉「長谷小路周辺遺跡」など中世の遺跡で出土例が報告されている[5]。

第14図は木製品である。**14—1～3**は柵状の施設を構築する材で、縦杭として使用されたものである。**14—1**は先端を焼いて尖らせたための焦げが見られる。元部はほぞが作られている。**14—2**は丸太を削ったもの、**14—3**はその皮を剥いだやや小型のものである。**14—4**は一方にほぞ穴を設けた角材である。**14—5**は８㎝間隔に４×2.5㎝の方形のほぞ穴を穿ったもので、横軸材として使用されたものであろうか。**14—6**はヘラ形を呈すもので、ヘラ部分に径数㎜の穴が穿たれている。おそらく御敷きの底板をヘラ状木製品に転用したものと思われる。



第15図　SK02実測図（S＝1：40）

ＳＫ０２（第15図）

ＳＫ０１の南に隣接して検出した土坑である。長径2.6m、短径2.0mの楕円形プランを呈し、深さ１m弱を測る。擂り鉢状の断面を呈し、底から著しく湧水する。井戸枠等の施設は検出しなかったため、素堀の井戸と考えられる。

遺物は図化できる個体はなかったが、上層から下層まで須恵器や土師器の破片を出土する。赤色塗彩された土師器小片も若干見られるが、時期を決定する遺物はないため、奈良・平安時代から中世の遺構と考えられる。おそらく、ＳＫ０１と同時期の遺構と思われる。

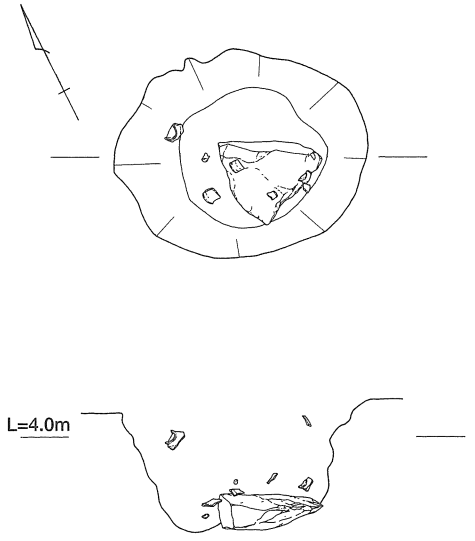
ＳＫ１０（第16図）

D14グリッドの東壁近くで検出したピット状の土坑である。径1.0mのほぼ円形の平面プランを呈し、深さ50cmを測る。底面に根石と思われる平板な礫（長さ40cm、厚さ14cm）が置かれている。

覆土からは上層から下層にかけて、須恵器・土師器の破片が出土している。17―１は輪状摘みを持つ須恵器の蓋で、口縁の返りはやや大きい。８世紀前半の所産と思われる。17―２も須恵器の蓋であるが、口縁の返りはなく輪状または擬宝珠状の摘みが付くものと思われる。17―３は高台を持つ須恵

器坏の底部で、回転糸切り痕が残る。８世紀後半の所産と考えられる。**17—４～６**は内外面に赤色塗彩された土師器の破片で、**17—６**は高台付の坏または皿と思われる。これらはいずれも８～９世紀のものと考えられる。

覆土のうち５～10層は柱の埋め土と思われ、ＳＫ10は奈良・平安時代の柱穴跡の可能性が考えられる。しかし、対応するピットが周辺に確認できなかったため、土坑として扱った。おそらく調査区外へ展開しているものと思われる。



第16図　SK10実測図（S=1：30）

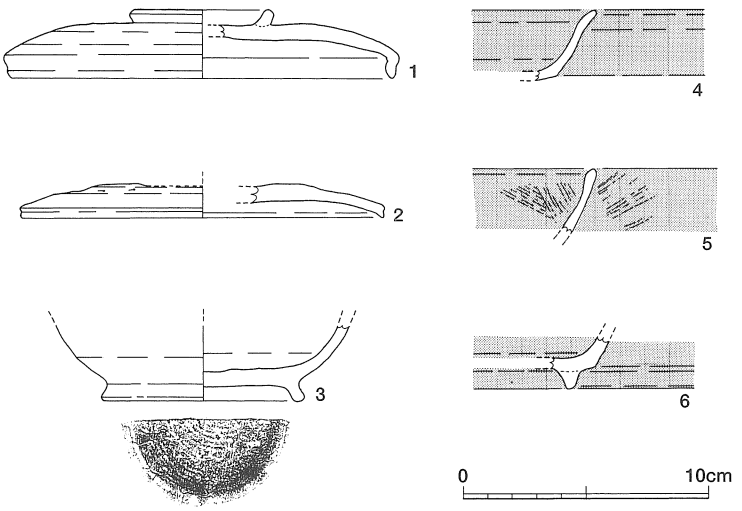
ＳＫ１７（第18図）

Ｃ２グリッドで検出した遺構で、ＳＤ０３を切って掘り込まれている。径約2.0m、深さ約60㎝を測る土坑で、不整円形プランを呈す。底面は凹凸があり、中心部がやや深くなっている。

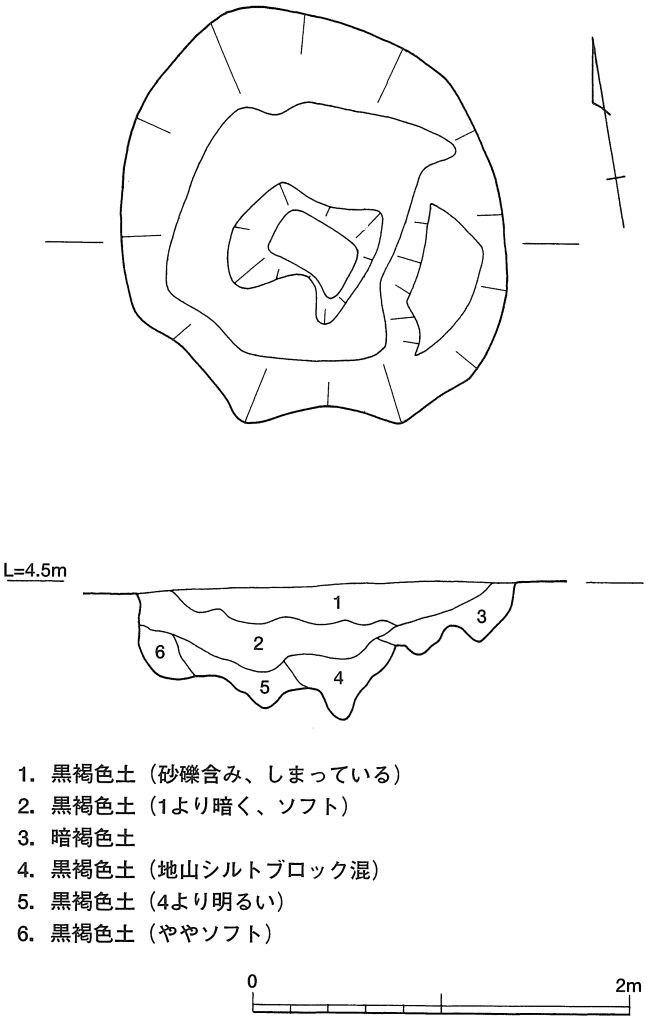
遺物は土師器の破片が若干出土している。図化できなかったが、16世紀代のものと思われる坏破片が１点見られることから、中世末の土坑と考えられるが、遺構の性格は不明である。

ＳＫ１８（第19図）

ＳＤ２３の東Ｅ・Ｆ２グリッドで検出した浅い土坑である。半楕円形の平面プランを呈すが、南側が細くなっており、溝になる可能性も考えられる。しかし、攪乱よって破壊されているため、形状がはっきりしない。北側は調査区外へ広がるものと考えられる。検出面で最大幅2.0mを測り、長さは2.5m以上になるものと思われる。深さは、0.2m程度であるが、中央部が深さ45㎝程度落ち込んでおり、中型の須恵器甕（**20—１**）が１個体口縁を上にした状態で出土している。押しつぶされたような格好で口縁の一部を欠いているが、ほぼ完形に復元できた。落ち込み内に埋納されたものと思われる。覆土からは土師器の破片がわずかに出土している。検出時にこの甕のものと思われる須恵器の破片を採取していることか



第17図　SK10出土遺物実測図（S=1：3）



第18図　SK17実測図（S=1：40）

ら、上面は後世に削平されているものと思われる。遺構の性格は不明だが、時期は甕の形状から古墳時代後期（６世紀後半）の範疇に入るものと思われる。

ＳＫ１８出土遺物（第20図）

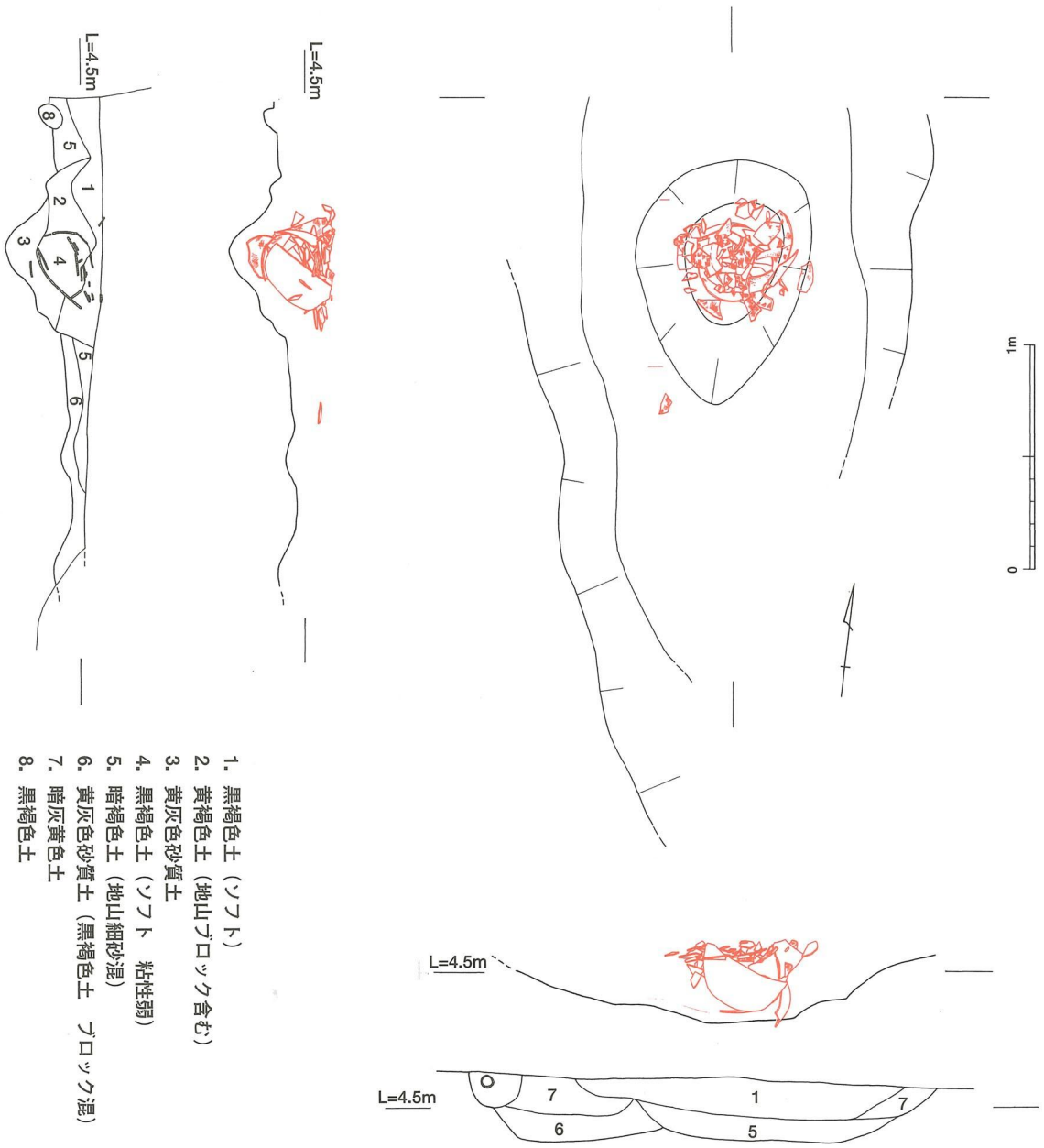
１は中型の須恵器の甕である。口径21.6㎝、器高55.2㎝をはかり、中心よりやや上に最大胴部径（46.9㎝）がくる。口縁は緩い段を持って短く外反する。丸底であるが焼成時に変形している。肩部には自然釉が付着し、焼成時の剥離痕が一部見られる。調整は内面に円形当て具痕が、外面は平行タタキが施され、胴下半部に弱いカキメを施す。６世紀後半の所産と考えられる。２は弥生土器の甕で、口縁は「く」の字状に屈曲する。端部を丸く収め、胴部がやや張る。調整は風化のためはっきりしないが、内面に刷毛目が残り、頸部外面には成形時の指圧痕が見られる。松本Ⅲ―１様式に相当するものと考えられる[6]。混入と思われるが、弥生中期中葉の土器は本調査区においてこの１点のみである。３は須恵器の蓋で、外面に幅３㎜の沈線が１条巡る。６世紀代の所産と考えられる。

ＳＫ１９（第21図）

Ｅ２グリッドで、ＳＤ２３の東肩を切る形で検出した土坑である。長径1.5ｍ・短径0.9ｍの楕円形プランを呈し、深さ30㎝を測る。柱穴とした場合、対応するピットが見あたらない。遺構の性格は不明であるが、遺構内から土師器の坏（21―１）が１点ほぼ完形で出土している。体部は直線的に開き、底径に比して器高はやや低い。底は回転糸切り離しで、轆轤成形の指なでの痕が顕著に見られる。形状から、９世紀後半の所産と思われる。同様の坏は、第１次調査（平成６年度）においても出土しており、当該期の遺跡の拡がりを考察させるものである。

黒色土落ち込み（第３図）

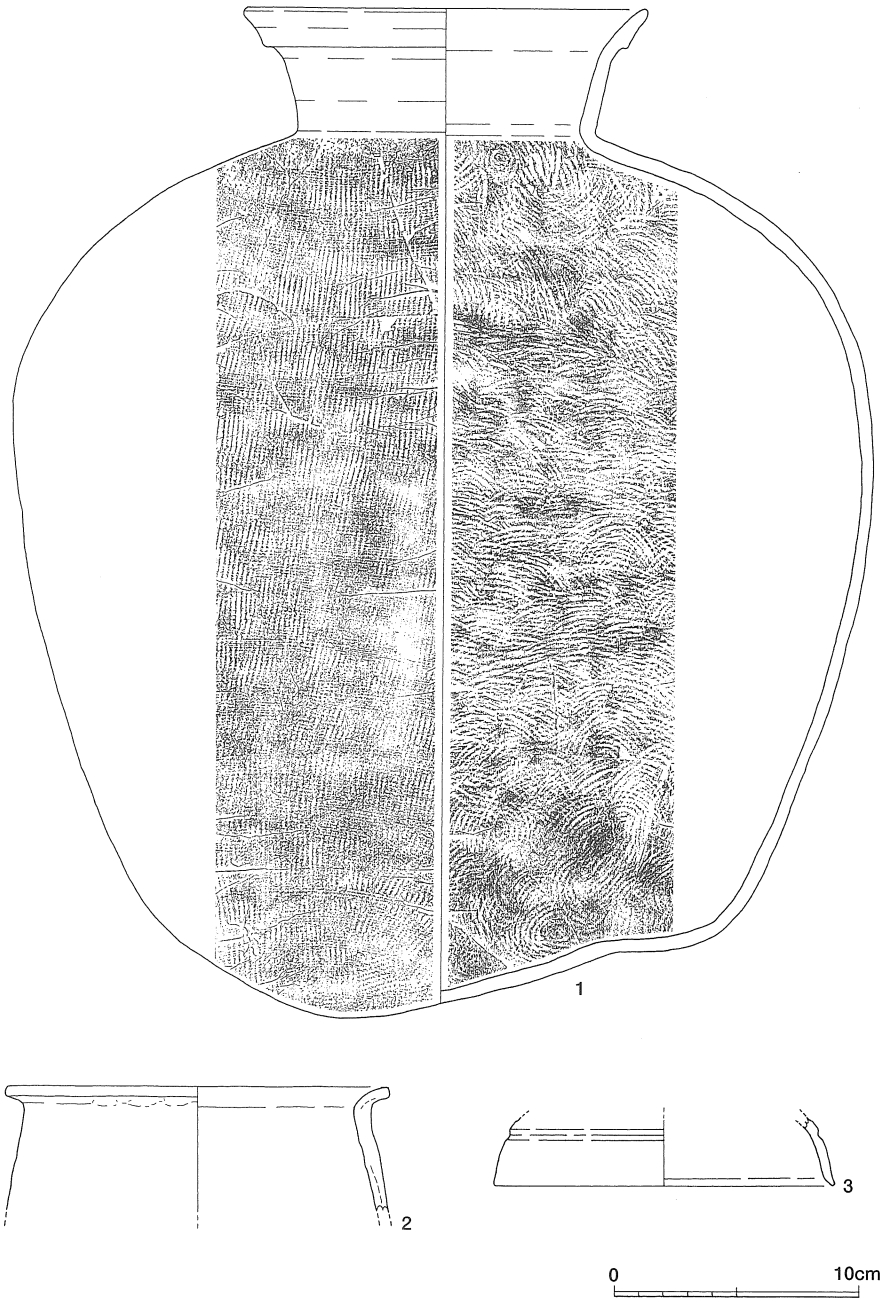
遺構としてはとらえなかったが、７．８グリッドで黒褐色土の落ち込みを検出した。攪乱により上層のほとんどを破壊されているため、正確な形状・規模を掌握できない。ＳＤ０５に沿うような形で半円形のプランになると思われ、東の調査区外へ広がる。緩やかに下り、約60㎝の深さになる。砂礫



第19図　SK18実測図（S=1：30）

を若干含むものの、均一に黒色土が堆積し、下層は粘質土になる。

遺物は土師器の小破片がわずかに見られる程度で、時期は不明である。しかし、ＳＤ０４．０５に切られることから、奈良・平安時代以前には黒色土が堆積していたものと考えられる。ただ、ＳＤ１０との切り合いは攪乱のため確認できず、落ち込みとしての時期は不明である。



第20図　SK18出土遺物実測図（S=1：3　1はS=1：4）

5．溝（第3、22～31図）

ＳＤ０１．０２（第3図）

ＳＫ０１．０２に切られるかたちで検出した、東西方向にほぼ平行に走る溝状遺構である。この２本の溝は、ともに幅0.6～1.2m、深さ30～60㎝　を測り、逆台形の断面を呈す（第27図）。２本の溝の間隔は約３ｍを測る。溝の方向はＳＤ１１．１８．１９．２２と同方向になる。

覆土からは土師質片・須恵器片がわずかに出土しており、奈良・平安時代から中世にかけての遺構と考えられる。性格としては利水目的の溝が考えられるが、区画溝としての機能も推察される。

ＳＤ０３（第22図）

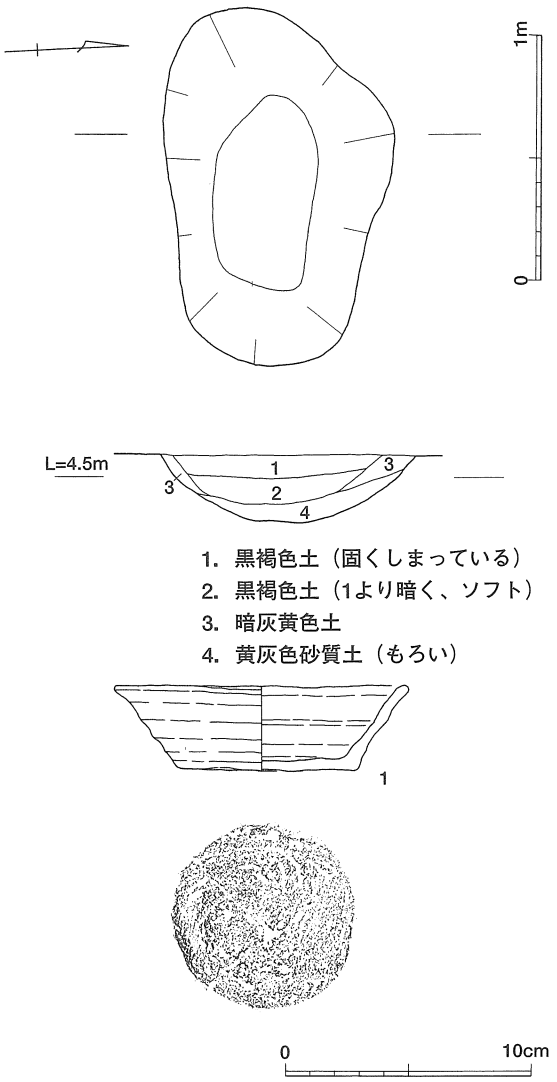
１～５グリッドまで調査区をほぼ南北方向に走る溝で、東西方向に走るＳＤ０１．０２に対して直交するように交差している。幅1.3m、深さ35㎝を測り、溝の断面は逆台形を呈す。ＳＫ０１．ＳＤ０１に切られるため、一部の検出にとどまり、ＳＫ０１の北側で検出したＳＤ０５に続くかどうかは不明である。３．４グリッドでは約3.5m西にあるＳＤ０４と平行して走る。南側で西に分かれるが、攪乱のため方向ははっきりしない。

覆土からは、須恵器・土師器・赤色塗彩土師器の破片がわずかに出土する。時期を決定する資料に乏しいが、新しい遺物を含まないことや、北側でＳＤ０１．ＳＫ０１に、南側ではＳＫ１７．ＳＤ２２．ＳＥ０１に切られることなどから古代の溝と考えられる。

ＳＤ０４（第22図）

調査区のＢ３グリッドからＣ６グリッドにかけて検出した、調査区を南北方向に直線的に走る溝で、幅１～1.2m、深さ50～60㎝を測る。断面はやや袋状の「U」字形を呈し、東のＳＤ０３に平行する。砂礫を多く含む覆土であり、中・下層に砂礫ブロックを含むことから、水が流れていたことが窺え、急激に埋没したものと考えられる。底面のレベルは南から北へ向かって緩やかに下っている。

弥生土器・須恵器・土師器甕・赤色塗彩土師器片などが若干出土しているが、図化できたものは２点のみであった。28―１は、口縁に２条の凹線を施す弥生時代中期後葉の甕破片で、混入と思われる。28―２は、須恵器坏の口縁部で奈良時代のものと思われる。遺構の時期を決定するのは難しいが、中世末から近世初頭にかけての溝と考えられるＳＤ０１．０２に切られることとあわせ、ＳＤ０３と方向を同じくすることから、奈良・平安時代の溝と考えられる。12グリッドから北で検出したＳＤ１２．１３と方向や形態が類似しており、灌漑用の溝が推定される。



第21図　SK19実測図（遺構S=1：30　遺物S=1：3）

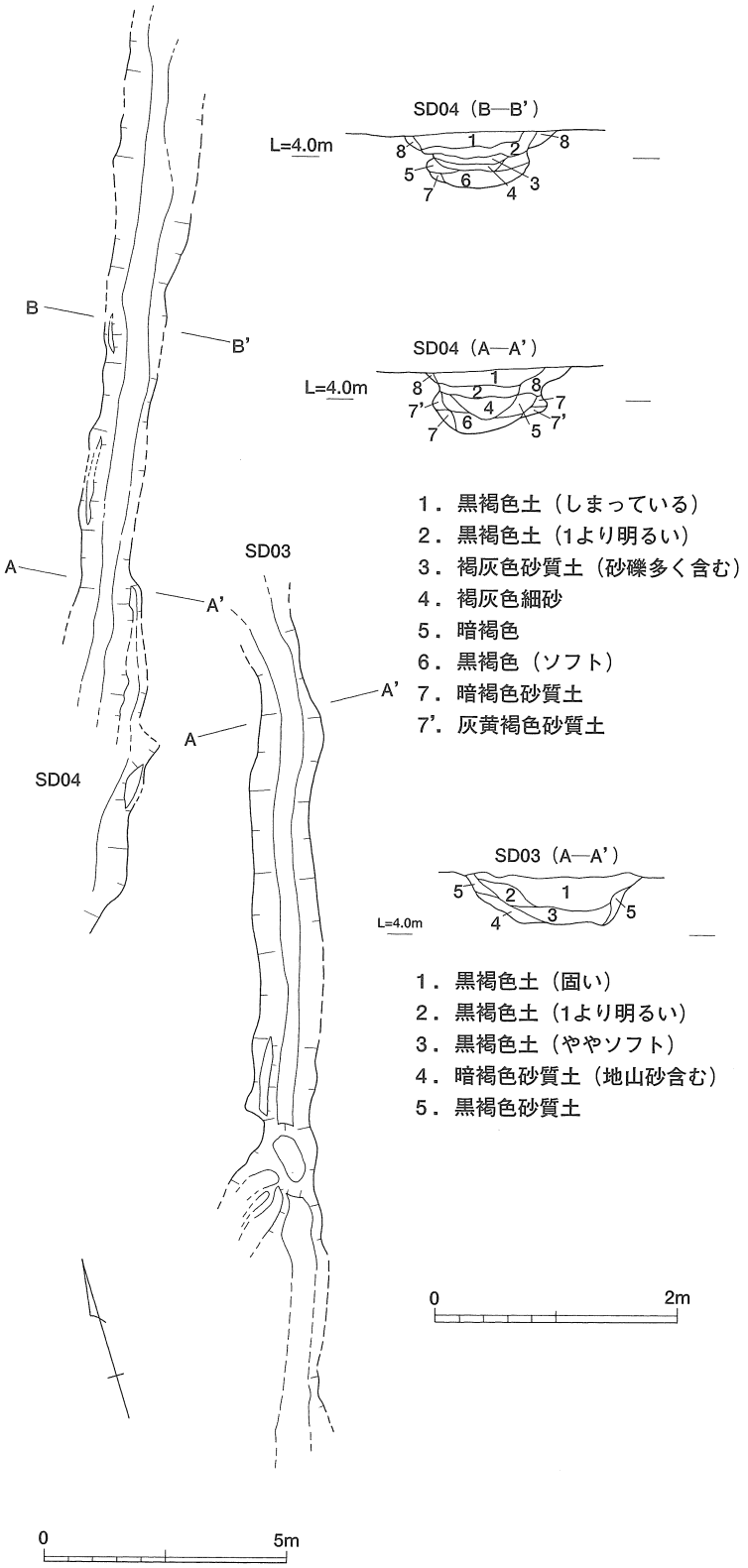
ＳＤ０５．０６（第３図）

５グリッドから８グリッドにかけて検出した細い溝状遺構で、ＳＤ０５．０６とも幅0.5～0.7m、深さ20～40㎝を測る。ほぼ平行にやや東側に弧を描いて走り、北側はともに攪乱で切られている。ＳＤ０６は南側で調査区外へ展開していき、ＳＤ０５は南側でＳＤ０４に切られ、ＳＫ０１に切られて消失する。ＳＫ０１の南側で検出したＳＤ０３につながるものかどうかは不明である。

覆土からは土師器破片がわずかに見られるのみで図化できるものはない。ＳＤ０４やＳＢ０３のピットに掘り込まれることから、それらより古いと考えられるが、時期は不明である。

ＳＤ０８．０９（第23図）

Ｂ９・10グリッドで検出した、約0.8m間隔でほぼ平行して走る溝状遺構である。ＳＤ０８は幅0.6～1.0m、ＳＤ０９は幅0.8～1.2m、深さ30～50㎝を測る。ともに南側を攪乱により破壊されている。ＳＤ０８はＳＤ０６につながる可能性も考えられるが、確定できない。北側も攪乱により、消失しているが、調査区外へ続くものと思われる。方向はＳＤ０９がＮ－22°－Ｗ、ＳＤ０８はやや西へ振って、Ｎ－24°－Ｗを指向する。



第22図　SD03.04実測図（遺構S=1：150　土層S=1：60）

ＳＤ０９の上層から、ほぼ完形の状態で土師器の坏（28—３）が１点出土している。８世紀後半から９世紀にかけての坏と思われ、口径12.6㎝、器高3.6㎝を測る。底部はやや丸みを持ち、削り後ナデて仕上げる。全面に赤色塗彩され、色落ちや摺れが見られないことから、ほとんど使用されていないものと思われる。奈良・平安期の溝と考えられる。

ＳＤ１０（第24図）

Ｂ８～Ｃ９グリッドで検出した南西から北東方向に走る溝である。幅は南側で1.2ｍ、北側で2.2ｍを測り、北に向かって広がるが、底面幅は30～40㎝である。深さは40～50㎝で、断面は鉢状を呈す。攪乱により大部分が削られるため一部の検出にとどまり、正確な形状が把握できないが、やや東方向に湾曲している。覆土はややソフトな黒褐色土で、砂礫はあまり含まない。

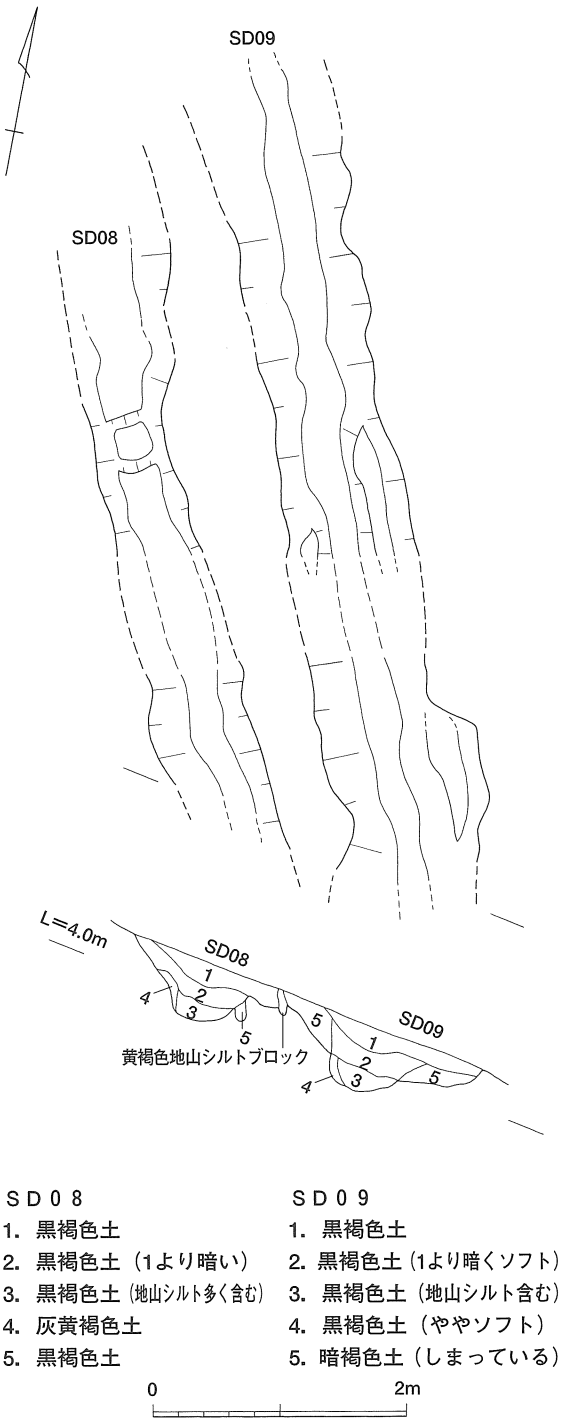
須恵器・土師器破片が若干出土するが、小破片で時期を決定するものはない。ＳＤ０５．０６．１１に切られるため、これらより古いと考えられる。南で検出したＳＤ０４と同方向になるが、同時期の溝かどうかは不明である。

ＳＤ０４とは垂直方向で約７ｍ離れている。

ＳＤ１１（第３図）

Ｂ・Ｃ９グリッドで検出した細い溝状遺構で、ＳＤ０１．０２と同じ東西方向に走っている。幅0.7～1.1ｍ、深さ40㎝弱を測る。逆台形の断面を呈し（第27図）、覆土からは須恵器と土師器の小片が

わずかに見られるのみで、時期を決定する遺物は出土していない。ＳＤ０８．０９を切り込んでいることや、形態・方向がＳＤ０１．０２や他の東西方向の溝状遺構と同じであることから奈良・平安時代から中世の遺構と思われる。



第23図　SD08、09実測図（Ｓ＝1：60）

ＳＤ１２．１３（第25図）

Ｂ12グリッドからＥ16グリッドにかけて検出した溝状遺構である。幅はＳＤ１２が0.9～1.6m、ＳＤ１３が0.5～1.4mで、深さはともに10～30㎝と浅く、ほぼ同規模・同形態を呈している。断面は皿状で、底面は凹凸が見られる。北側が浅くなるのは後世の削平によるものである。この２条の溝は所々攪乱により分断されるが、1.6～1.8m間隔で平行して、調査区の北側約３分の１の長さをほぼ南西方向から北西方向に向かって走っている。わずかに東側に弧を描いているが、これは当時の地形に沿う形と考えられる。北側はＳＤ１８．１９に切られ、南側は攪乱により破壊されているが、調査区外へ延長していくものと思われる。

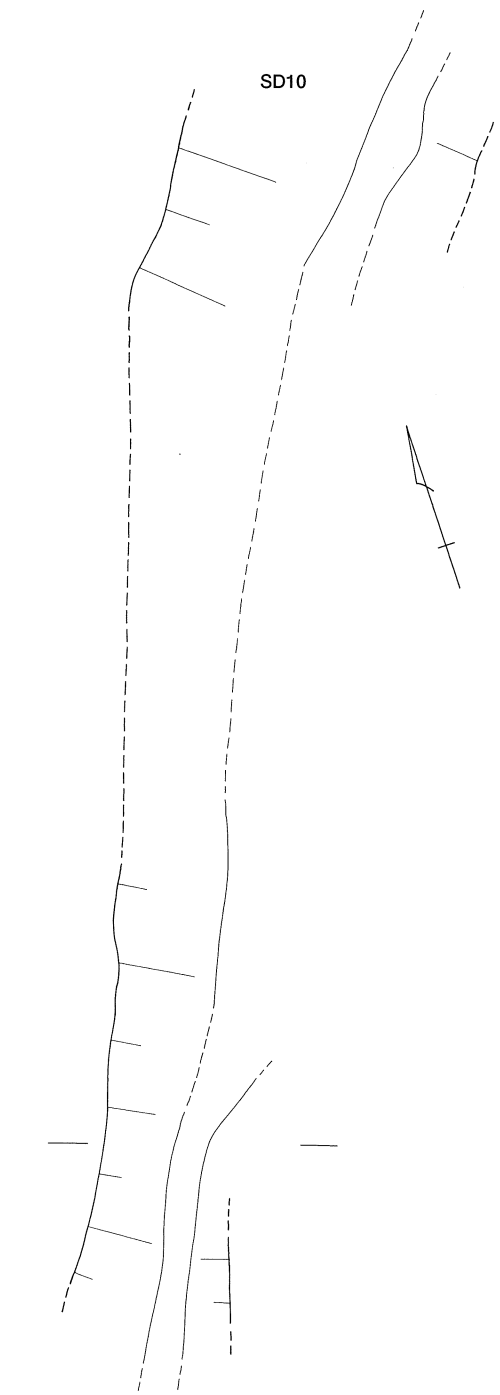
遺物は須恵器と土師器の破片をわずかに出土する。赤色塗彩された土師器の坏や、回転糸切りの底部片などが見られることから、この２条の溝状遺構は古代の水利目的に使用された溝ではないかと思われる。

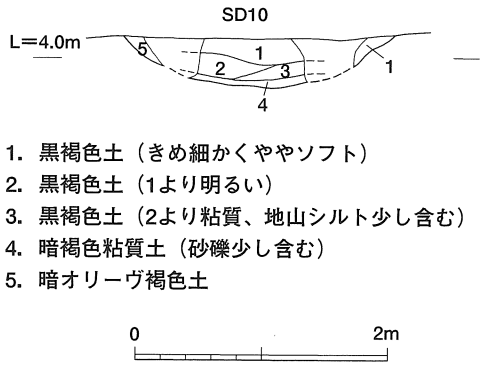
ＳＤ１２．１３出土遺物（第28図4～8）

4は須恵器坏の口縁部、5は小さな返りを持つ須恵器蓋の破片である。6は回転糸切り離しの土師器坏の底部、7は口径25.4㎝を測る土師器の甕である。8は内湾して立ち上がる須恵器の坏である。これらの遺物は８世紀後半から９世紀にかけてのものと考えられる。

ＳＤ１５（第26図）

Ｂ10グリッドで検出した溝状遺構である。東西方向からやや北にふって走る。方向としてはＮ－56°－Ｅを指向し、同方向の溝は本調査区においては他に見られない。北側のほとんどと東側を攪乱により破壊されており、下層部がわずかに残存している状況で、遺構の性格をつかみきれない。また、一部をＳＤ０８．０９に掘り込まれるため、全体の形態を掌握しきれないが、検出面で幅1.5m、深さ





1. 黒褐色土（きめ細かくややソフト）
2. 黒褐色土（1より明るい）
3. 黒褐色土（2より粘質、地山シルト少し含む）
4. 暗褐色粘質土（砂礫少し含む）
5. 暗オリーヴ褐色土

第24図　SD10実測図（S＝1：60）

40㎝前後を測り、実際はそれ以上の規模になると考えられる。断面も攪乱のため一部分の観察にとどまったが、おそらく逆台形の断面形を呈するものと思われる。

黄褐色の地山シルトを若干含む覆土で、下層から黒曜石の小型無茎石鏃（**28—10**）が１点出土している。しかし、他に土師器の小片がわずかに出土するのみで、時期を決定する資料に乏しい。

ＳＤ１８・１９（第３図）

調査区の北端である16.17グリッドで検出した浅い遺構で、調査範囲外へ展開するものと思われる。調査範囲内では当初、1.5m幅で検出したが、掘り下げていく段階で深さ30㎝弱の２本の細い溝に分かれ、北側をＳＤ１９とした。平面プランではＳＤ１８と１９の新旧関係ははっきりしなかったが、土層の観察（第27図）ではＳＤ１８がＳＤ１９を切って掘られていることから、ＳＤ１８は１９の掘り直しと考えられ、その時期差は短かったと思われる。

覆土からは、須恵器や土師器が若干出土しているが、図化し得たのは須恵器の高坏（**28—９**）のみである。脚部に長三角形の２方透かしが入るものであるが、混入遺物と考えられるため、遺構の時期を決める指標とはならない。青磁器の小破片を含むこと、また、古代の溝状遺構であるＳＤ１２．１３を切っていることから中世の遺構と考えられる。ＳＡ０１．ＳＢ０１と軸方向が合致しており、これらの遺構に合致した建物を区画する溝の可能性が考えられる。

ＳＤ２０（第３図）

調査区南西端のＡ１．２グリッドの西壁際で検出した、幅0.8m、深さ約４０㎝を測る溝である。断面は逆台形を呈す。遺物は土師器破片をわずかに出土する。南北に走り、ＳＤ０４の方向とあっているが攪乱により寸断しているため、ＳＤ０４とのつながりは不明である。ＳＤ０３とも方向を同じくすることから、同時期の溝と考えられる。

ＳＤ２１．２２（第３図）

Ａ・Ｂ・Ｃ１グリッドで検出した、ともに幅約1.0ｍ・深さ50㎝を測る溝で、東西方向に平行して走っている。断面は逆台形を呈す。（第27図）２本の溝の間隔は約3.0ｍである。

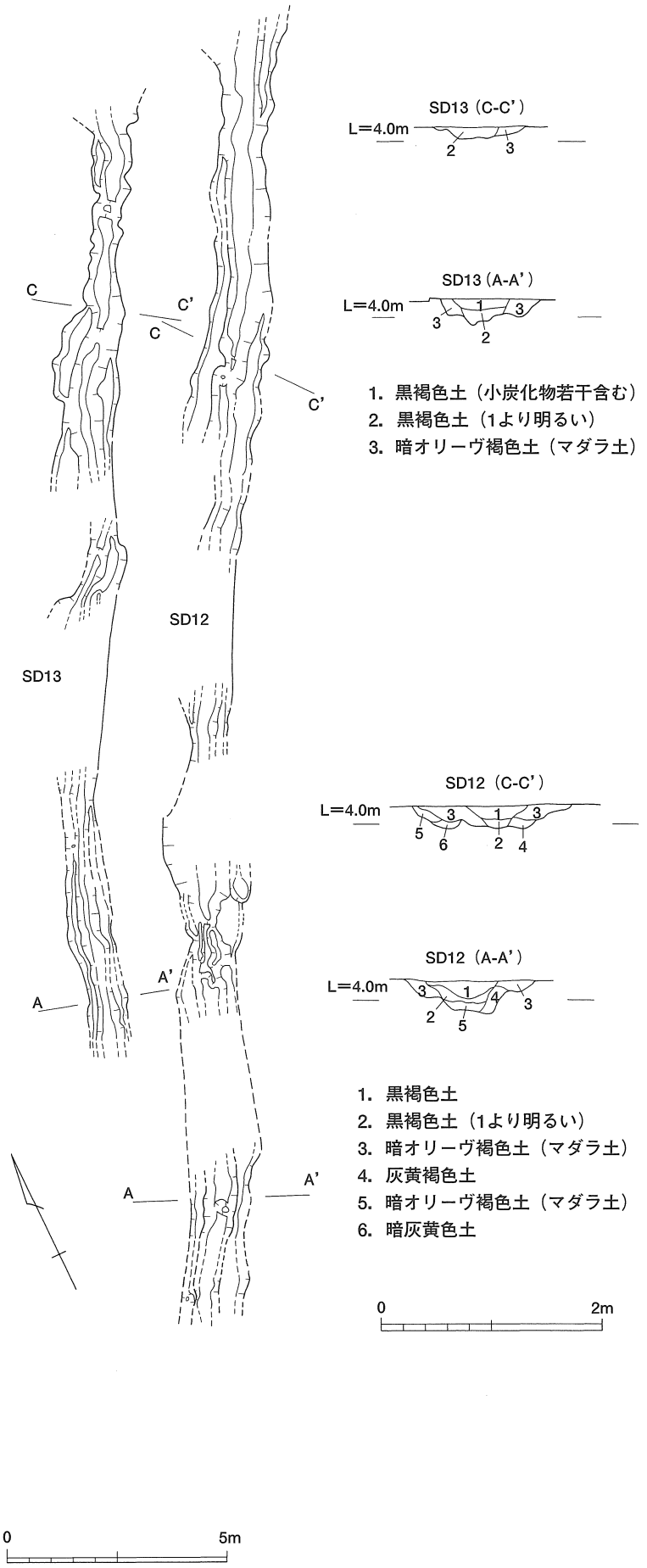
ＳＤ２１は調査区の南西端での検出で、２ｍほどの調査に止まったが、攪乱に一部を削られ、ＳＤ２０を切っている。

ＳＤ２２は南北方向の溝であるＳＤ０３．２０を切っているが、ＳＥ０１に切られる。遺物は土師器破片をわずかに出土するのみで時期ははっきりしないが、ＳＤ０１．０２と規模・方向を同じくすることから、中世の区画的な溝ではないかと考えられる。

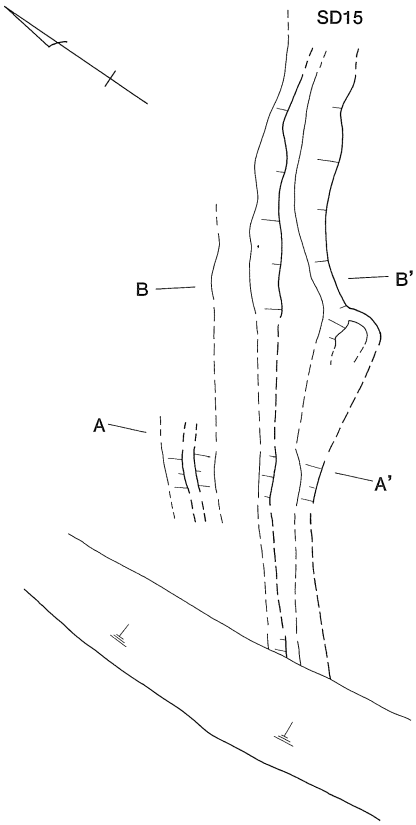
ＳＤ２３（第29図）

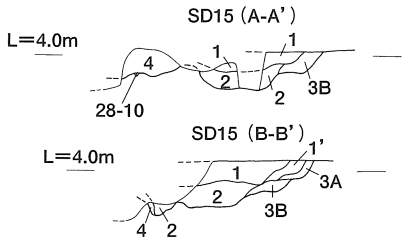
調査区の２．３グリッドを南北方向に走る溝状遺構である。南側は東肩を攪乱により削られるが、約11ｍの長さを検出し、南北の調査区外へ続くものと思われる。幅は約3.3ｍあり、断面は鉢状を呈す。深さは80㎝を測るが、上面は後世に削平されており、実際はもう少し深かったと思われる。

土層の観察から、何回かの掘り直しが行われたことが窺える。12～14層の堆積する　溝（旧ＳＤ２３）が始めに掘られ、その後8～11層の溝（新ＳＤ２３）に掘り直され、最終的に浅く幅広の溝となり、1～7層が堆積して埋まったと考えられる。旧Ｓ



第25図　SD12、13実測図（遺構Ｓ＝1：150　土層Ｓ＝1：60）





1.　黒褐色土（黒色土ブロック混）
1'.　黒褐色土（1より黒色土少ない）
2.　暗褐色土（やや砂質）
3A.　暗灰黄色砂質土
3B.　灰黄褐色土（マダラ土）
4.　暗オリーヴ褐色土（マダラ土）

0　2m

第26図　SD15実測図（S＝1：60）

Ｄ２３・新ＳＤ２３とも下層は砂質土で、急激に埋まったものと考えられる。

遺物は溝の中央部分で出土している。上層から中層にかけて多く見られ、弥生時代後期前葉の土器片をわずかに含むが、ほとんどは終末期から古墳時代前期前葉にかけてのものである。上層及び下層（砂質土）から、幾内系土器（布留甕）の破片が何点か出土している。上層・下層とも遺物の時期差はほとんどみられないため、溝の埋まった時期もこの時期と考えられる。

布留式甕の口縁は「く」の字状に外反して開くものがほとんどである。口縁端部は丸みを持つもの、面を作るものとがある。また、複合口縁細頸壺が何点か出土している。頸部には板状工具で刺突した羽状文が施され、中心に沈線を巡らし有軸としたものも見られる。複合口縁細頸壺はほとんどが草田６期新から７期にかけてのものである（小谷１～２期）(7)。高坏も数点出土しているが、同時期のものと思われ、小谷１～２期に相当する(8)。小谷３期に入る遺物は見られない。

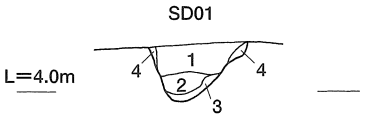
ＳＤ２３から出土する土器（甕・壺類）は上・下層とも草田７期に相当するものがほとんどであるが、掘り直し後の層からは草田６期の遺物も含まれる。これは、旧ＳＤ２３に埋まっていたものが掘り返され、横に盛土され置かれたものが、新ＳＤ２３の廃棄時に溝内に埋没したものと考えられる。

弥生時代後期前葉の土器は草田１から２期にかけてのものである。中期後葉の土器片を若干出土するが、溝を掘りなおした際に混入したものと思われる。弥生時代後期中葉の遺物を欠いているが、ＳＤ２３は中期後葉から後期前葉に築かれ、何回か掘り直しされながら継続して使用され、古墳時代前期前葉に至って廃棄されたものと考えられる。

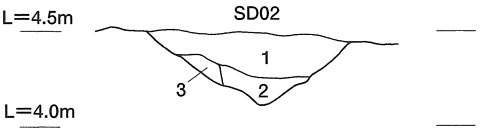
ＳＤ２３出土遺物（第30.31図）

30―１．２は弥生時代後期前葉の甕の口縁部である。**１**は３条、**２**は５条の擬凹線を複合口縁に施す。**１**は新ＳＤ２３の下層からの出土である。

30―３～６は複合口縁細頸壺で、**３．４**は口縁端部上面に平坦面を作る。**５．６**の口縁端部は外側にやや肥厚して面を作る。**６**の頸部には板状工具による有軸羽状文が施される。２条の沈線により区画され、上段の刺突文が下段よりやや長い。頸部内面には指のなでつけ痕が見られ、頸部以下はヨコ

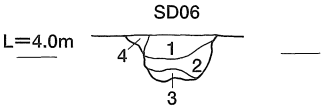


1. 黒褐色土
2. 黒褐色土（1より暗く、ソフト）
3. 暗オリーヴ褐色砂質土
4. 灰黄褐色土

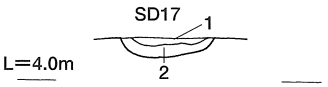


1. 黒褐色土
2. 黒褐色土（1より明るい）
3. 黒褐色土（地山シルト含む）

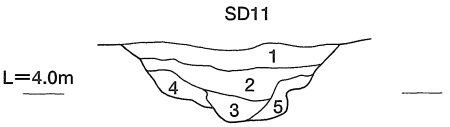
1. 黒褐色土（砂礫多い）



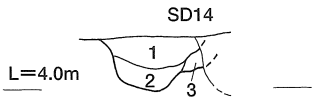
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土（1より暗く、ソフト）
3. 黄褐色砂質土
4. 暗褐色土



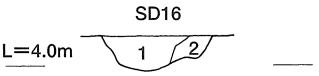
1. 黒褐色土
2. 暗褐色砂質土



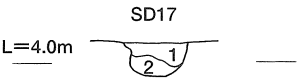
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土（1より暗い）
3. 黒色土（ソフト）
4. 灰黄褐色土
5. 暗オリーヴ褐色土



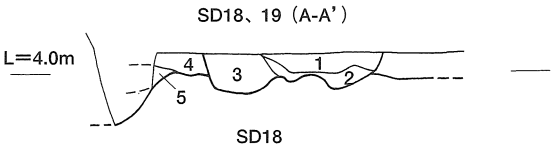
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土（1より明るい）
3. 暗オリーヴ褐色土



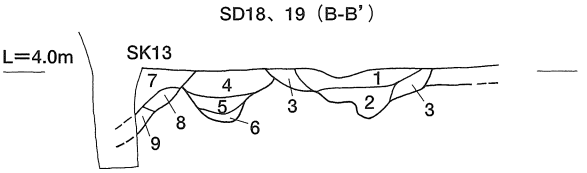
1. 暗オリーヴ褐色土
2. 暗灰黄色土



1. 灰黄褐色土
2. 暗灰黄色土（マダラ土）



1. 黒褐色土（しまっている）
2. 黒褐色土（ややソフト）
3. 灰黄褐色土（地山シルト少し含む）

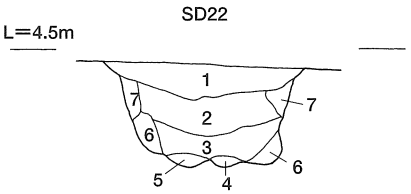


SD19

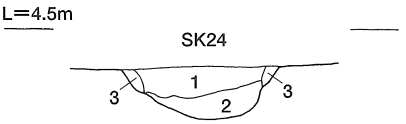
4. 黒褐色土（いまっている）
5. 黒褐色土（4より暗いややソフト）
6. 暗灰黄色土

SK13

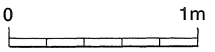
7. 黒褐色土
8. 暗オリーブ褐色土
9. 黒褐色土（粘性中）



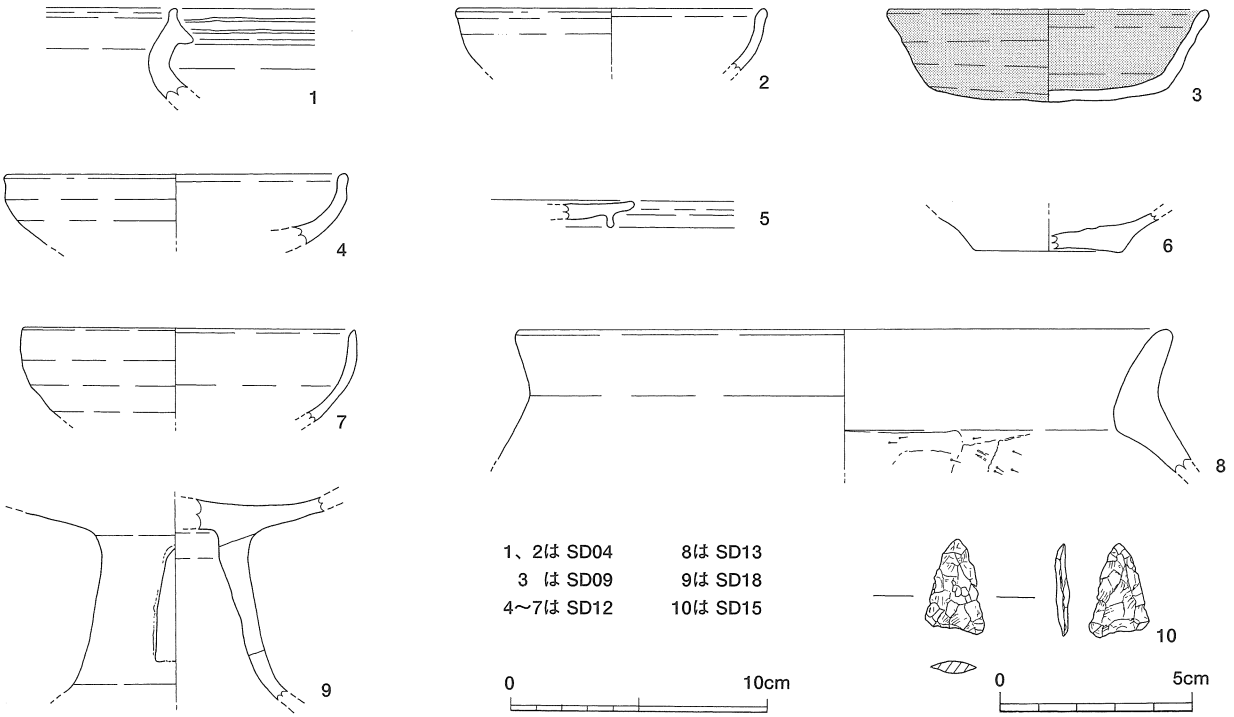
1. 黒褐色土（しまっている）
2. 黒褐色土（1より明るい）
3. 黒褐色土（2より暗い）
4. 灰黄褐色土
5. 灰黄褐色砂質土
6. 黄灰色砂質土
7. 黄褐色土



1. 黒褐色土（砂礫多い）
2. 黒褐色土（1より明るい）
3. 灰黄褐色砂質土



第27図　溝状遺構土層図（S＝1：40）



第28図　SD04、09、12、13、15、18　出土遺物実測図（S＝1：3、SD15はS＝1：2）

方向の削りが施される。これらの壺は草田７期に相当する。

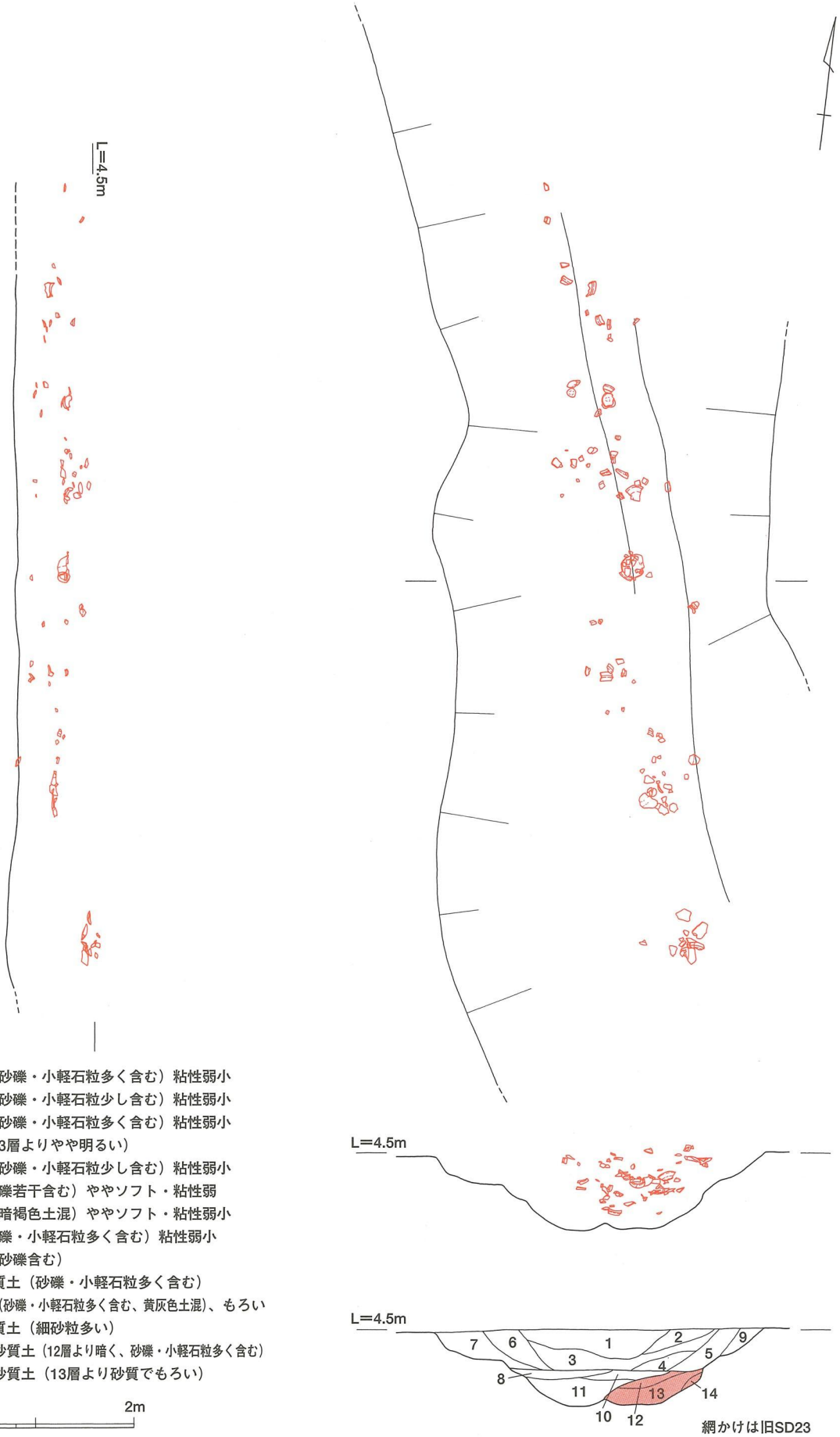
30—７～11は複合口縁の甕である。口縁端部をやや外側に引き出し、面を作る。稜の突出は鈍い[9]。**９**の肩部には幅１㎝の刷毛状工具による波状文が巡る。**11**の体部はほぼ球形であるが、器壁が薄く、底部は径4.0㎝ほどの平底の痕跡を残す。外面の調整は肩部から胴部上半はヨコ刷毛目、胴下半はタテ刷毛目が施され、下半以下ははっきりしない。内面の調整は頸部下はヨコ方向の、肩部から胴部は斜め方向の削りが施され、胴下半から底にかけては指によるなでつけ痕が見られる。これらの甕のうち**７．８．９**は草田７期、**10．11**は草田６期新段階に相当すると考えられる。

31—１はやや内傾する複合口縁の甕で、口縁端部に面を持つ。稜は指でひねり出したように突出し、肩部外面に１㎝幅の弱い刷毛目が巡る。

31—２．３は布留式甕の流れを汲む単純口縁の甕で、「く」の字状に外反する口縁の端部は丸く収める[10]。**31—３**は、荒いタテ方向の刷毛目で調整された肩部に、ヘラ描きの直線文が施される。**31—４**は台付壺と思われる。器壁はやや厚く、黄褐色を呈する。球形の胴部に低脚坏の脚のような台が付くもので、肩部以上を欠損しているため器種は不明である。池田満雄氏の報告にあった脚付壺によく似ているが、その口縁は複合の直口壺である[11]。また、類似する台付土器は鹿島町の「南講武草田遺跡」からも出土しているが、その上部は複合口縁甕の様相を呈するものである[12]。

31—５．６は高坏の坏部で、口縁端部に面を作る。**６**は段を有する。**５**の外面、**６**の内面にタテ方向のヘラミガキが施される。**31—７**は低脚坏の脚部である。内面に２本のヘラ描きの沈線が見られる。他に鼓形器台の脚部内側に線刻が施されたものがわずかに見られた。前述の池田満雄氏の報告にあった脚付壺にも、２本線が刻まれているとあり、このようなヘラ描き沈線は、使用目的や土器制作者の何らかの意図を表した記号と考えられる。

31—８は小型の蓋で、旧ＳＤ２３の下層から出土している。**31—９**は口径12.0㎝、器高4.8㎝を測る



1. 黒褐色土（砂礫・小軽石粒多く含む）粘性弱小
2. 暗褐色土（砂礫・小軽石粒少し含む）粘性弱小
3. 暗褐色土（砂礫・小軽石粒多く含む）粘性弱小
4. 暗褐色土（3層よりやや明るい）
5. 暗褐色土（砂礫・小軽石粒少し含む）粘性弱小
6. 黒色土（砂礫若干含む）ややソフト・粘性弱
7. 黄褐色土（暗褐色土混）ややソフト・粘性弱小
8. 褐色土（砂礫・小軽石粒多く含む）粘性弱小
9. 黄褐色土（砂礫含む）
10. 黄褐色砂質土（砂礫・小軽石粒多く含む）
11. 灰黄色砂（砂礫・小軽石粒多く含む、黄灰色土混）、もろい
12. 黄灰色砂質土（細砂粒多い）
13. 暗黄灰色砂質土（12層より暗く、砂礫・小軽石粒多く含む）
14. 暗灰黄色砂質土（13層より砂質でもろい）

第29図　SD23実測図（S＝1：60）

椀形の坏である。底部は削り後なでられたと思われ、削り痕が残り内湾して立ち上がる体部はヨコなで調整で、口縁端部を尖り気味に仕上げる。この椀形の坏は、天神遺跡・古志本郷遺跡で出土したものと同型と思われる[13]。31—10は高坏と思われるが、坏部上半と脚部下端を欠損している。坏部内外面、脚部外面に細いミガキが施され、脚部には円形の透かしが穿たれる。脚の接合法は在地のものとは異なり、坏の中心部に脚をそのまま圧着した様である。31—11は低く裾広がりに開く、畿内系高坏の脚で、浅い橙色を呈す。小型の椀状の坏が付くと考えられる。これらの土器のうち30—１と31—１．２．10は新ＳＤ２３下層から出土している。

本調査地から約20ｍ南に位置する、四絡幼稚園改築事業に伴う第４次発掘調査地において、南北方向に走る溝状遺構ＳＤ０４を検出した。方向的にはＳＤ２３の延長上に位置し、規模・形態や時期も類似していることから、同一の溝と考えられる。既存の道路により分断されているが、このＳＤ２３と第４次調査区のＳＤ０４をつなぐと、右にわずかに湾曲しており、「環濠」の様相を呈している。

ただ、溝の東側（内側）または西側（外側）では当該期の住居跡等は確認されていない。第４次調査区のＳＤ０４から西15ｍには同軸方向に走る溝状遺構ＳＤ０３があり、やはり同じように右方向にわずかに曲がっている。これらの溝状遺構の状況については、第４次発掘調査報告書[14]において詳解されている。

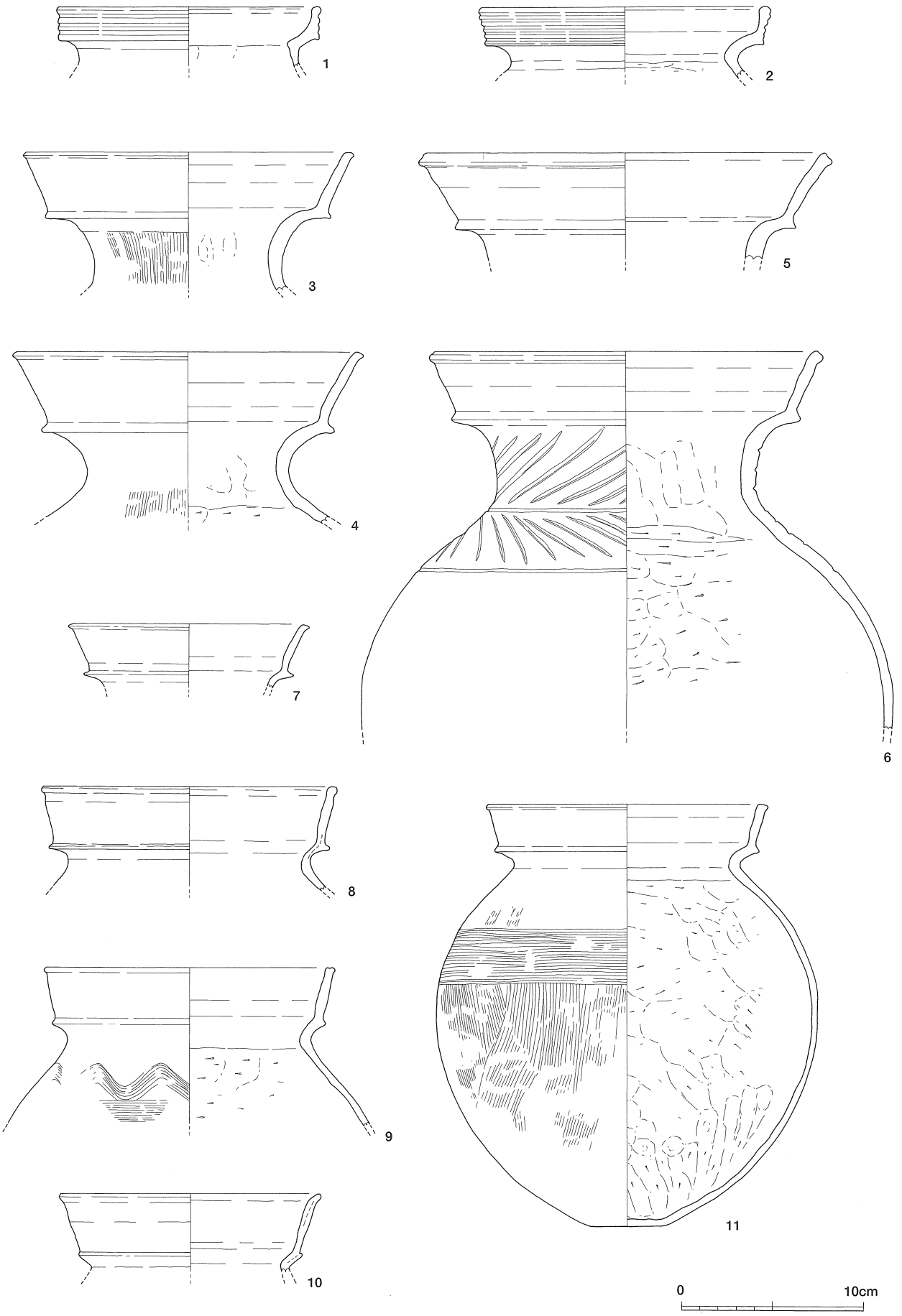
ＳＤ２４（第３図）

調査区の南東端Ｆ２．３グリッドで検出した溝で、幅１ｍ弱・深さ約40㎝を測る。断面は逆台形を呈し（第27図）、ＳＤ２１．２２と形態は類似しているが、北西から南東へ走っており（Ｎ－57°－Ｗを指向する）、方向が異なる。本調査区において同方向の溝はＳＤ０８．０９があるが、距離がかなり離れているため、同一・同時期の溝と考えるのは難しい。時期を決定する遺物は出土しておらず、検出規模もわずかなため、遺構の性格も不明である。

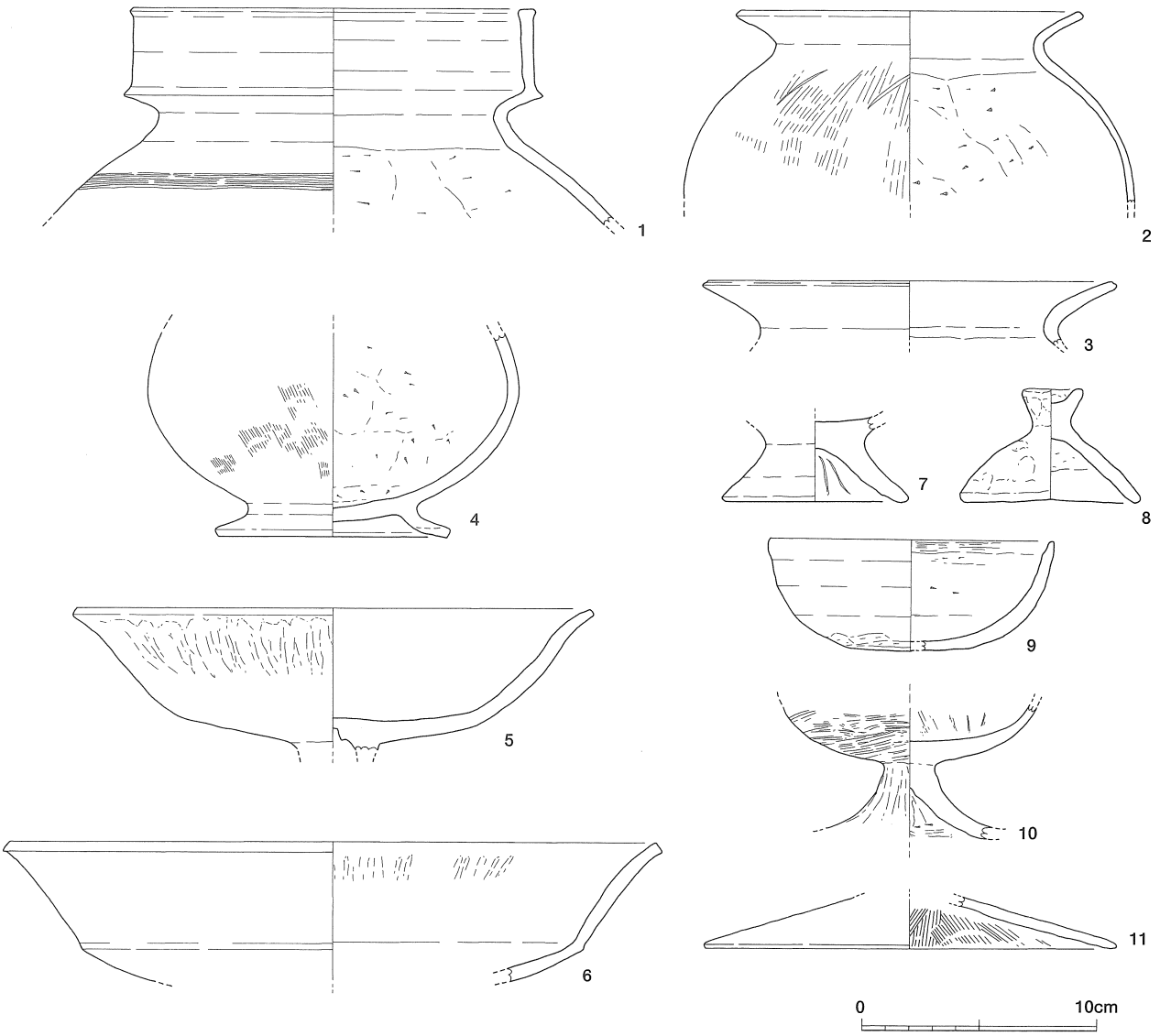
遺構外出土遺物（第32.33図）

32—１～13は須恵器である。１．２は蓋で、１は輪状の摘みが付く。２は返りがやや深いもので、１と同様輪状の摘みが付くものと思われる。３～５は坏で、３．４は内湾する体部に口縁端部がやや外へ屈曲する。５．６は底部外周に高台が付き、体部は直線的に立ち上がる。７は壺と思われる底部で、外面には回転ヘラ削りが施される。８～11は皿で、８．９．11の底部は回転糸切り後ナデ調整、10は回転糸切り痕が残る。11には高台が付く。12.13は高坏の脚部である。これらの須恵器のうち１～３は奈良時代に想定され、他は概ね８～９世紀代の所産と考えられる。

32—14～21は土師器である。14～17は坏で、14は貼り付け高台が付き、15は「ハ」の字に開く高足状の高台が付く。16は皿状に、17は直線的に体部が開く。14.16.17は全体に赤色塗彩される。
いずれも、８世紀後半から９世紀前半にかけてのものと考えられる。18.19は土師器の甕で口縁はラッパ状に開くものである。21は土師器の高坏脚部である。20は移動式竈の底部で、内面に荒い削り、外面は刷毛目調整で下部は指圧痕が見られる。23は土製支脚の受部、22は脚部である。22の中央部には径１㎝程度の孔が穿たれている。24は擂り鉢の口縁部破片である。中世末から近世初頭のものと考え



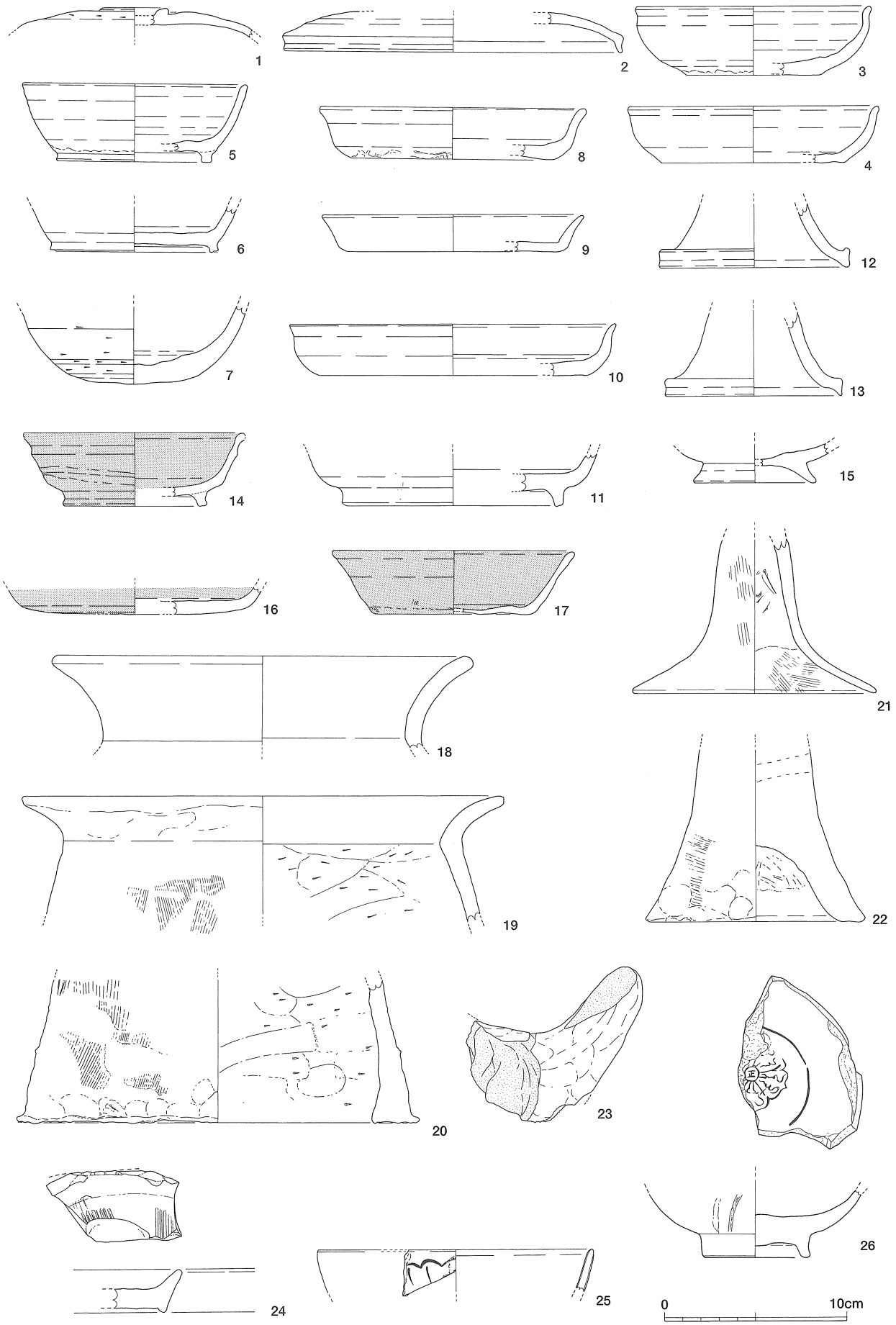
第30図　SD23出土遺物実測図１（Ｓ＝1：3）



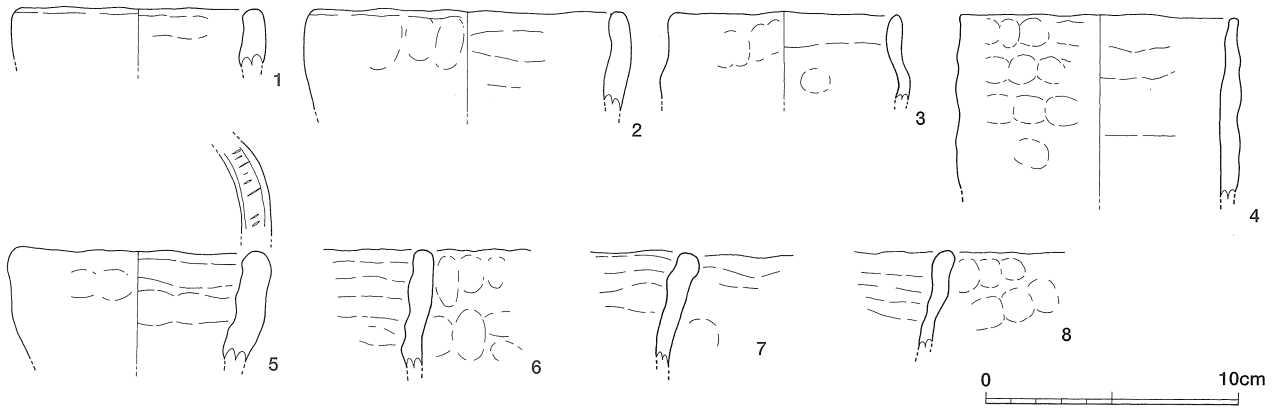
第31図　SD23出土遺物実測図２（Ｓ＝1：3）

られる。25は李朝期の青磁椀の口縁部破片で、削りだしの蓮弁文が施される。26は青磁椀の底部で、外面には弱い蓮弁文が施され、見込みに正の字が刻まれている。中国産と推定される。

33―１～８は製塩土器である。口径９～12cmを測る。いずれも外面には指圧痕、内面には強い横なで痕が見られ、浅い橙色を呈す。口縁端部は平坦面を作るもの（１．２．５．７）と、丸く収めるもの（６．８）、細くなるもの（３．４）があり、５の上面には刻み目が施される。３．４以外は器壁が厚い。すべて底部を欠いているが、概ね砲弾状を呈するものと思われる。８世紀から９世紀にかけての六連式の焼塩土器と考えられる。これらは、出雲地方では、稲佐・原山（大社）や上長浜貝塚などで出土している製塩土器とよく似ていることから、近場の海浜部で生産されたものが運ばれてきて使用されたものと考えられる。



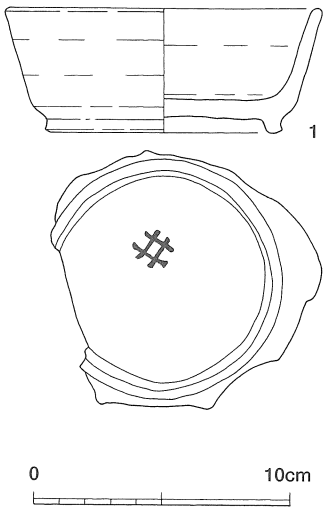
第32図　遺構外出土遺物実測図１（Ｓ＝1：3）



第33図　遺構外出土遺物実測図２（Ｓ＝1：3）

墨書須恵器（第34図）

攪乱中であるが、C11グリッドから墨書須恵器（34―１）が１点出土している。高台付の坏底部で、口径12.4cm、底径9.3cm、器高4.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、貼り付け高台が付く高広ⅣＢ期（８世紀末～９世紀）に比定される[15]。底面は回転糸切り後無調整で、そのほぼ中心部に「井」の字が書かれている。縦横1.5cm角でしっかりとした字体で書かれている。しかし、現状では肉眼で薄く確認できる程度である。約100m南に位置する第１次調査地（平成６年度）の２区Ａ３グリッドからは、同時期の所産と考えられる「井」の字が描かれたヘラ書き須恵器が出土している。井戸等に関連する使用目的のためであろうか。このような土器を持つ集団がこの地に存在していたものと考えられる。



第34図　墨書須恵器実測図（Ｓ＝1：3）

第４章　まとめ

今回の調査地である小山遺跡第３地点では、これまで第１次調査（平成６年度）と第２次調査（平成９年度）が行われている。第１次調査では、奈良・平安時代の溝・土坑・ピット等が多数検出されている。また、８世紀から９世紀にかけての墨書土師器やヘラ描き須恵器が出土しており、『出雲国風土記』記載の「神門郡八野郷庁」の位置関係を探る手がかりとなるものである。今回の調査で出土した墨書須恵器（**34－１**）には、第１次調査２区検出のヘラ描き須恵器と同じ「井」の字が書かれている。また、製塩土器も第１・２次調査同様検出した。ほぼ同時期の遺物と考えられることから、当該期に遺跡は全域に発展していたものと考えられる。しかし、これらの土器はいずれも包含層や攪乱からの出土であり、「郷庁」に比定できる遺構は検出されていない。墨書須恵器やヘラ描き須恵器だけでは、一概に官衙と関連づけられないため、集落の範囲内でとらえるべきものと考えられる。

溝状遺構のうち南北方向に走る溝６条が、奈良・平安時代の溝と考えられる。これらの溝はＳＤ０３とＳＤ０４・２０（ＳＤ２０をＳＤ０４の延長と考える）、ＳＤ０８とＳＤ０９、ＳＤ１２とＳＤ１３というように、２条平行する形態をとっている。２条同時に存在していたものか、前後して掘られたものかは不明であが、遺構面のコンタはこれらの溝の方向に合っており、当時の地形に沿って掘られた灌漑用の溝と思われる。８世紀から９世紀の遺構としては他に、ＳＫ１０とＳＫ１９がある。

東西方向に走る溝は、遺構の切り合いなどから、上述の溝より後～中世末までのものと考えられる。ＳＤ０１とＳＤ０２、ＳＤ２１とＳＤ２２がそれで、３～４ｍの間隔で平行している。また、ＳＤ１１．ＳＤ１８．１９も同方向になり、ＳＤ１１やＳＤ１８．１９については攪乱や調査区外に平行する溝がある可能性も考えられる。ＳＤ２２とＳＤ０２の間は約13ｍ、ＳＤ０１とＳＤ１１は約23ｍ、ＳＤ１１とＳＤ１８は約36ｍそれぞれ距離をもって掘られている。ＳＤ１８の南には同時期のＳＡ０１とＳＢ０１があり、これらの溝は区画性を持って作られたことが考えられる。ＳＤ０１より南側で検出した中世末の井戸や土坑は南北方向に並んでおり、ここに地下水の筋があったことが分かる。ＳＫ０１からは骨材を採取した牛馬の骨が出土しており、近くに骨材生産の工人の存在が窺える。

調査区の南側で中型甕を出土するＳＫ１８は、古墳時代後期の遺構としては本調査区で唯一のものである。第１・２次調査区でも、古墳時代前期後半から後期にかけての遺構・遺物はほとんど検出されておらず、遺跡全域にわたって空白期間であったと考えられる。

ＳＫ１８の西で検出したＳＤ２３は「環濠」的様相を呈す大溝である。ＳＤ２３は弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて掘削され、古墳時代前期前葉に埋没するが、これは天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡など、出雲平野の遺跡で検出される「環濠」の状況に類似する。この溝の埋まった古墳時代前期前葉から後、ＳＫ１８の掘られるまで、本遺跡においては衰退期であったと考えられる。

本調査区からは松本Ⅲ－１様式の土器片が１点（**20－２**）出土しており、遺跡の出現は弥生時代中期中葉までさかのぼるものと考えられる。本調査区より約0.5㎞北西には、弥生時代中期から後期において、出雲平野北部地域の拠点的集落としての役割を持つ矢野遺跡が位置しており、本遺跡はその衛星的な遺跡として派生、発展したものと考えられる。

参考文献一覧

山本　清　「出雲市大塚町土器散布地」『島根考古学』第２号　1948

田中義昭　「出雲市小山遺跡第１地点の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究』　1992

田中義昭他　「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『昭和63年度科学研究費補助金（一般研究Ａ）研究成果報告書』　1989

近藤義郎編　『日本土器製塩研究』　1994

内田律雄　「製塩土器について」『芝原遺跡』松江市教育委員会　1989

久保和士・松井　章「角・骨・皮に関する生産」『図解・日本の中世遺跡』小野正敏編　2001

島根県教育委員会　「古志本郷遺跡Ⅰ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』　1999

島根県教育委員会　「古志本郷遺跡Ⅱ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ』　2001

四絡郷土誌編集委員会　『四絡郷土史』　1986

出雲高校社会部　「発掘レポ」『紫苑』７号　1968

出雲市教育委員会　『遺跡が語る古代の出雲』　1997

出雲市教育委員会　『市道渡橋平野線道路改良工事に伴う小山遺跡第２地点発掘調査報告書』　1998

出雲市教育委員会　『上長浜貝塚』　1996

註

（１）　出雲考古学研究会　『古代の出雲を考える５　出雲平野の集落遺跡Ⅱ』　1986

（２）　出雲市教育委員会　『島根県立看護短大教職員宿舎建設に伴う小山遺跡発掘調査報告書』1999

（３）　出雲市教育委員会　「小山遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書　第６集』1996

（４）　島根県教育委員会　「蔵小路西遺跡」『一般国道９号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』1999

（５）　松井　章氏のご教示による。

（６）　松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社　1992による。

（７）　弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての編年は、鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５』1992と、中川　寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会』第13集　1996を参考とした。

（８）　古墳時代前期前葉の編年は、松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根古学会誌』第17集　2000による。

（９）　壺・甕の口縁形態と底部の調整については、上述（８）の文献を参考とし、その位置づけについては松山智弘氏よりご教示頂いた。

（10）　次山　淳「初期布留式土器群の西方展開－中四国地方の事例から－」『古代』第103号1997による

（11）　池田満雄「四絡小学校付近出土土器」『出雲市の文化財』第１集1956

（12）　鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡」1992Ｆ－３区出土51－350

（13）　出雲市教育委員会『天神遺跡第７次発掘調査報告書』1997ＳＤ０６出土61－63

（14）　出雲市教育委員会『四絡幼稚園改築事業に伴う小山遺跡第３地点発掘調査報告書（第４次発掘調査）』　2002

（15）　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』　1984による。

出土遺物観察表（土器）

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
8-1	20	SB02-P4	土師器	製塩土器（破片）				内外面に指頭痕あり	にぶい黄橙色	精製土	
8-2	20	SB02-P3	須恵器	坏（底部）		7.1		回転糸切り	灰色		
11-1	20	SE01	土師器	甕	16.2			肩部外面はヨコ刷毛目 内面はヨコ削り	灰黄色	微砂粒含む（石英・長石）	頸部下内面に指圧痕
11-2	20	SE01	土師器	低脚坏	19.5	11.2	8.1	外面はナデ	浅い黄橙色	微砂粒多く含む	
11-3	20	SE01	土師器	坏	14.2	6.3	3.4	ロクロ回転成形、回転糸切り	黄褐色	精製土	完形
11-4	20	SE01	土師器	坏（底部）		5.6		回転糸切り、見込みに渦巻き状のナデ	灰褐色	精製土	外面一部にスス
11-5	20	SE01	土師器	坏（底部）		6.7		回転糸切り	内／にぶい黄褐色 外／にぶい黄橙色	微砂粒若干含む	
13-1	21	SK01	青磁器	椀	13.3			線描きの蓮弁文	灰オリーブ色	密	
17-1	22	SK10	須恵器	蓋	15.6		2.8	天井部は回転削り、輪状摘み	灰色	密、１㎜以下の砂粒を少し含む	
17-2	22	SK10	須恵器	蓋	14.8		1.4	天井部は削り後ナデ	灰白色	密	
17-3	22	SK10	須恵器	坏（底部）		8.0		高台付、回転糸切り	青灰色	密、１㎜以下の砂粒を少し含む	
17-4	22	SK10	土師器	坏（破片）				ナデ	明赤褐色	密	赤色塗彩
17-5	22	SK10	土師器	坏（破片）				ナデ	明赤褐色	密	赤色塗彩
17-6	22	SK10	土師器	坏（底部破片）				高台付	明赤褐色	密	赤色塗彩
20-1	23	SK18	須恵器	甕	21.6		55.2	外面は平行タタキ、内面は円形当て痕、胴下半にカキメ	灰色	密、白色粒子若干含む	ほぼ完形
20-2	23	SK18	弥生土器	甕	15.4			内面は刷毛目、頸部に成型時の指圧痕	黄灰色	微砂粒少し含む（石英・長石）	松本Ⅲ－１期
20-3	23	SK18	須恵器	蓋	15.8			外面に１条の沈線	灰色	密	
21-1	22	SK19	土師器	坏	11.8	7.3	3.5	ロクロ成形、回転糸切り後ナデ	褐色	精製土（石英若干含む）	ほぼ完形
28-1	27	SD04	弥生土器	壺（口縁破片）				２条の凹線	黒色	微砂粒含む	
28-2	27	SD04	須恵器	坏（口縁部）	11.9			ナデ	暗灰黄色	密	
28-3	22	SD09	土師器	坏	12.6	9.0	3.6	内外面はナデ、底面は削り後ナデ	橙色	精製土	完形 赤色塗彩
28-4	27	SD12	須恵器	坏	13.4			ナデ	灰色	密、１㎜以下の微砂粒含む	
28-5	27	SD12	須恵器	蓋（破片）				平坦な口縁で、小さな返りが付く	灰色	密	
28-6	27	SD12	土師器	坏（底部）		5.9		回転糸切り	浅黄色	微砂粒含む。	
28-7	27	SD12	土師器	甕	25.4			ナデ、頸部以下削り	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
28-8	27	SD13	須恵器	坏	13.9			ナデ	灰色	密	
28-9	27	SD18	須恵器	高坏				三角の２方透かし	灰色	密	
30-1	24	SD23	弥生土器	甕	14.4			口縁に貝殻復縁による３条の擬凹線、内面頸部以下削り	内／灰黄色 外／黄灰色	微砂粒含む（長石・石英・雲母）	
30-2	24	SD23	弥生土器	甕	15.4			口縁に貝殻復縁による５条の擬凹線、内面頸部以下削り	内／黄褐色 外／灰黄色	微砂粒含む（石英・長石・雲母）	
30-3	24	SD23	土師器	壺	18.0			頸部外面タテ刷毛目、内面にナデつけの指圧痕	灰黄色	微砂粒少ない精製された土	
30-4	24	SD23	土師器	壺	19.0			頸部外面タテ刷毛目、内面にナデつけの指圧痕	灰黄色	微砂粒少し含む（石英・長石・雲母）	

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
30-5	24	SD23	土師器	壺	22.0			口縁端部を下方に引き出す	灰黄色	微砂粒多く含む（石英・長石・雲母）	
30-6	25	SD23	土師器	壺	21.0			口縁端部を下方に引き出す、頸部外面に有軸羽状文、下段にも沈線、頸部内面にナデつけの指圧痕	灰黄色	微砂粒多く含む（石英・長石・雲母）	
30-7	24	SD23	土師器	甕	13.0			ヨコナデ	淡い黄褐色	微砂粒少ない精製された土	
30-8	24	SD23	土師器	甕	16.2			口縁端部を外側に肥圧	内／浅黄橙色 外／灰白色	微砂粒含む	
30-9	24	SD23	土師器	甕	16.0			肩部に刷毛原体による１cm幅の波状文 、内面は不明瞭なヨコ削り	灰黄色	微砂粒多く含む（石英・長石・雲母）	外面一部にスス
30-10	24	SD23	須恵器	甕	14.4			口縁端部は緩く外反、小さく突出する稜、やや薄い器壁	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
30-11	25	SD23	土師器	甕	15.2	4.0	23.4	口縁端部に平坦面、外面肩部はヨコ刷毛目、胴下半はタテ刷毛目、内面胴下半に指頭痕とナデつけ痕	内／灰黄色 外／黒色、灰黄色	微砂粒多く含む（石英・長石）	外全面にスス付着 布留甕系
31-1	24	SD23	土師器	甕	16.0			口縁端部に平坦面、肩部外面に幅１cmのヨコ刷毛目、ヨコなで	黄灰色	微砂粒多く含む（石英・長石・雲母）	
31-2	24	SD23	土師器	甕（単純口縁）	14.4			外面タテ刷毛目、肩部にヘラ描きの直線文	内／黄褐色 外／灰黄色	密 微砂粒多く含む	外全面にスス付着
31-3	24	SD23	土師器	甕（単純口縁）	17.2			「く」の字状に大きく外反	明黄褐色	密 微砂粒多く含む	外面一部にスス付着
31-4	26	SD23	土師器	台付壺？		10.0		外面は細いタテ刷毛目後ナデ、内面は削り後一部ナデ消し？	黄褐色	密 微砂粒多く含む（石英・長石）	台付
31-5	26	SD23	土師器	高坏（坏部）	22.0			外面にタテ方向のヘラミガキ 接合部は指突痕α	灰黄色	微砂粒多く含む（石英・長石・雲母）	
31-6	26	SD23	土師器	高坏（坏部）	27.6			やや小さな段を持つ、内面にタテ方向のヘラミガキ、外面はヨコなで	内／灰黄色 外／灰褐色	微砂粒多く含む（石英・長石・雲母）	内面一部にスス付着
31-7	24	SD23	土師器	低脚（脚部）		7.6		内面縁周に１本、タテ方向に２本のヘラ描き沈線	浅黄色	微砂粒少ない精製された土	ヘラ描き沈線は記号か
31-8	26	SD23	土師器	蓋	7.4		4.8	外全面に指圧痕、内面中央部は削り、	灰黄色	微砂粒少し含む	手づくね状
31-9	26	SD23	土師器	坏	12.0		4.8	底部はヘラ削り後ナデ、内外面ヨコなで	内／灰黄色 外／黄橙色	微砂粒多く含む（長石）	
31-10		SD23	土師器	高坏				坏部外面はヨコ方向、坏部内面と脚部外面はタテ方向の細いミガキ	内／淡黄色 外／灰白色	微砂粒多く含む（石英・長石・雲母）	円形透かし
31-11	24	SD23	土師器	高坏（脚部）		17.5		低く開く、内面は弱い刷毛目	内／橙色 外／浅黄橙色	微砂粒少ない精製された土	
32-1	28	遺構外 F16Gr	須恵器	蓋				回転ナデ、天井部は削り	灰色	密	輪状摘み
32-2	28	遺構外 I1Gr	須恵器	蓋				回転ナデ	黄灰色	密	
32-3	28	遺構外 C13Gr	須恵器	坏	13.0	7.2	3.7	回転糸切り後ナデ	灰黄色	密 微砂粒少し含む	
32-4	28	遺構外 C11Gr	須恵器	皿	13.5	10.0	3.1	回転糸切り	灰色	密	
32-5	28	遺構外 D14Gr	須恵器	坏	12.3	8.4	4.3	回転ナデ	灰色	密 微砂粒含む	貼付高台付
32-6	28	遺構外 D14Gr	須恵器	坏（底部）		9.2		回転糸切り、見込み内ヨコナデ	灰色	密	高台付
32-7	28	遺構外 E16Gr	須恵器	壺（底部）				回転削り 底面は削り後ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	底面にスス付着
32-8	28	遺構外 C14Gr	須恵器	皿	14.6	11.0	2.8	回転糸切り後ナデ	灰色	密	
32-9	28	遺構外 E14Gr	須恵器	皿	14.1	11.5	2.0	回転ナデ	灰白色	密	
32-10	28	遺構外 D13Gr	須恵器	皿	18.0	14.6	2.8	回転糸切り、ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	焼成不良
32-11	28	遺構外	須恵器	坏（底部）	11.8			回転糸切り後ナデ	灰色	密	高台付
32-12	28	遺構外 F16.17Gr	須恵器	高坏（脚部）		10.3		回転ナデ	灰色	密	

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
32-13	28	遺構外 C10Gr	須恵器	高坏 （脚部）		9.6		回転ナデ	灰色	密	
32-14	28	遺構外 12Gr	土師器	坏	12.0	7.8	4.0	回転ナデ	明赤褐色	密	貼付高台付 赤色塗彩
32-15	28	遺構外 C.D15Gr	土師器	坏 （底部）		5.1		回転ナデ	橙色	微砂粒少し含む	高台付
32-16	28	遺構外 13Gr	土師器	皿		12.8		回転ナデ、内面に塗りの刷毛目痕	内／明赤褐色 外／赤褐色	密	赤色塗彩
32-17	28	遺構外 C.D15Gr	土師器	坏	13.2	8.6	3.5	糸切り後ナデ、	橙色	密 微砂粒少し含む	赤色塗彩
32-18	28	遺構外 C7Gr	土師器	甕 （口縁部）	23.1			ナデ	内／浅黄橙色 外／オリーブ黒色	微砂粒多く含む	
32-19	28	遺構外 C7Gr	土師器	甕	22.0			頸部以下外面はタテの刷毛目、内面はヨコ方向の削り	内／浅黄橙色 外／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
32-20	28	遺構外 D.E15Gr	土師器	竈 （底部）		21.8		外面はタテ刷毛目、内面はヨコ削り、端部に指なでつけ痕	にぶい褐色	微砂粒多く含む	
32-21	28	遺構外 B5Gr	土師器	高坏 （脚部）		13.4		外面はナデ、内面は削りと刷毛目	内／にぶい橙色 外／にぶい黄橙色	微砂粒含む	
32-24	28	遺構外	陶器	擂り鉢 （口縁部）				７条以上単位の擂り目	赤褐色	密 微砂粒少し含む	
32-25	28	遺構外 9Gr	青磁器	椀 （口縁部）	15.0			蓮弁文	灰オリーブ色	密	
32-26	28	遺構外 C9Gr	青磁器	椀 （底部）		11.6		蓮弁文 見込みに花文様	灰オリーブ色	密	中国製
33-1	29	遺構外 C15Gr	土師器	製塩土器	9.4			口縁端部丸い、ヨコナデ痕 器壁厚い	内／橙色 外／灰黄色	精製土	
33-2	29	遺構外 14Gr	土師器	製塩土器	12.4			口縁端部に平坦面、ヨコナデ痕 器壁厚い	内／浅黄橙色 外／黄橙色	微砂粒含む	
33-3	29	遺構外 C14Gr	土師器	製塩土器	9.2			口縁端部丸い、ヨコナデ痕 器壁薄い	にぶい橙色	微砂粒含む	
33-4	29	遺構外 16.17Gr	土師器	製塩土器	11.0			ヨコナデ痕、指頭痕 器壁薄い	橙色	微砂粒少し含む	
33-5	29	遺構外 C14Gr	土師器	製塩土器	10.4			口縁端部に平坦面を作り、刻目を施す、強いヨコナデ、器壁厚い	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む 赤褐色粒混	
33-6	29	遺構外 C13Gr	土師器	製塩土器 （口縁破片）				口縁端部に平坦面、ヨコナデ、指頭痕、器壁厚い	橙色	微砂粒含む	
33-7	29	遺構外 F15Gr	土師器	製塩土器 （口縁破片）				口縁端部に平坦面、ヨコナデ、指頭痕、器壁厚い	浅黄橙色	微砂粒含む 赤褐色粒混	
33-8	29	遺構外 C.D15Gr	土師器	製塩土器 （口縁破片）				口縁端部は丸い、ヨコナデ、指頭痕	内／浅黄橙色 外／黄橙色	微砂粒含む 赤褐色粒混	
34-1	29	遺構外	須恵器	坏	13.5			回転糸切り、回転ナデ	灰色	密	高台付 「井」の墨書

出土遺物観察表（土製品）

挿図番号	図版	出土地点	種別	法量（単位：cm、g）							色調	胎土	備考
				長	巾	高	底径	断面径	孔径	重量			
32-22	28	遺構外 16Gr	土製支脚 （脚部）				9.2				灰黄褐色	微砂粒多い 小砂粒含む	上部に径１cmの穿孔あり
32-23	28	遺構外 F16Gr	土製支脚 （受部）								にぶい橙色	微砂粒多い	一部スス付着

出土遺物観察表（石器）

挿図番号	図版	出土地点	種別	材質	法量（単位：cm、g）						備考
					最大長	最大幅	最大厚	外径	孔径	重量	
8-3	20	SB02-P2	石	凝灰岩	9.5	8.5	7.0			1,070	方形に加工、一部にスス付着 炉台か？
28-10	22	SD15	石鏃	黒曜石	2.5	1.6	0.3			4	平形無茎

出土遺物観察表（木製品・その他）

挿図番号	図版	出土地点	種別	遺存状況	法量（単位：cm、g）				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
14-1	21	SK01	杭	良	66.8	7.2			元部に臍、焼いて加工
14-2	21	SK01	杭	良	47.5	7.3			原木を使用
14-3	21	SK01	杭	良	38.3	5.4			皮を取り除いたもの
14-4		SK01	杭	良	37.0	4.9	2.9		角材
14-5	21	SK01	軸部？	一部欠損	41.0	6.2	4.6		方形の臍穴あり
14-6	21	SK01	ヘラ形	一部欠損	27.1	3.4	0.3		御敷きの底を転用
13-3	21	SK01	骨 （大腿骨）	一部欠損	22.5	7.7	4.2		長さ６cm、幅1.6cmの切り取り痕あり 「U」字形の骨材を採取

図　　版

調査区全景（上から）　合成写真

図版 2

SE01、SD03、23、SK18（上から）

調査区南半分（上から）

図版 4

調査区北半分（上から）

SB01（北から）

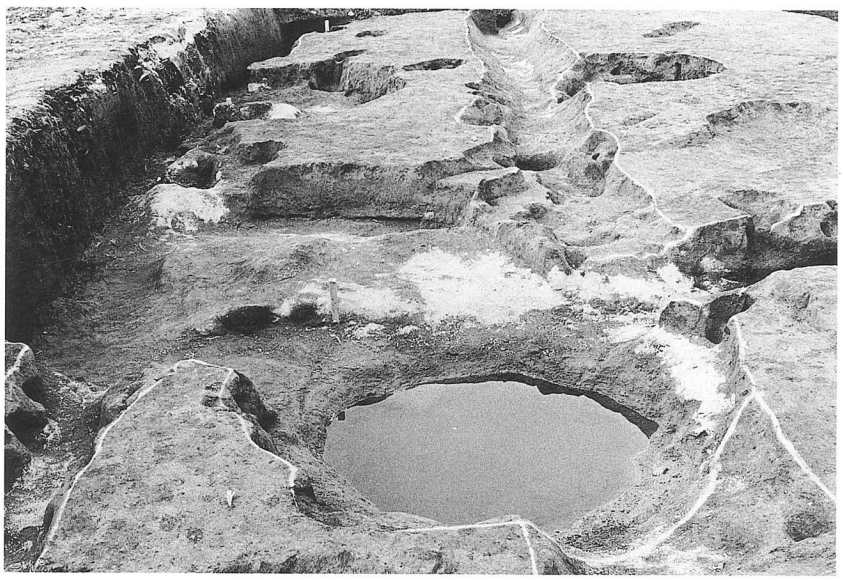
SB02（東から）

SB02.SD12.13プラン（東から）

図版 6

SE01遺物出土状況

SE01（南から）



SE01、SD03、20、21、22

SK01

SK01遺物出土状況

SK01、02（南から）

図版 8

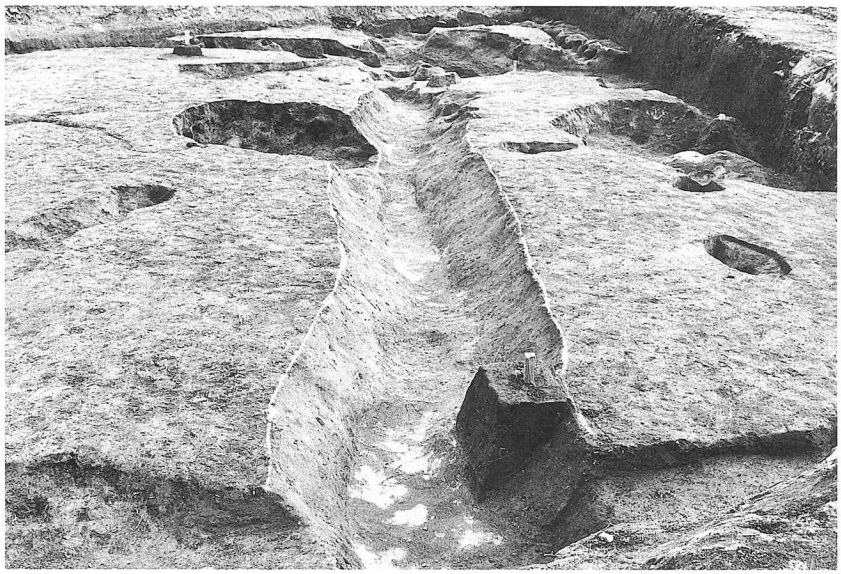
SK10遺物出土状況

SK18遺物出土状況

SK18（北から）

SD01

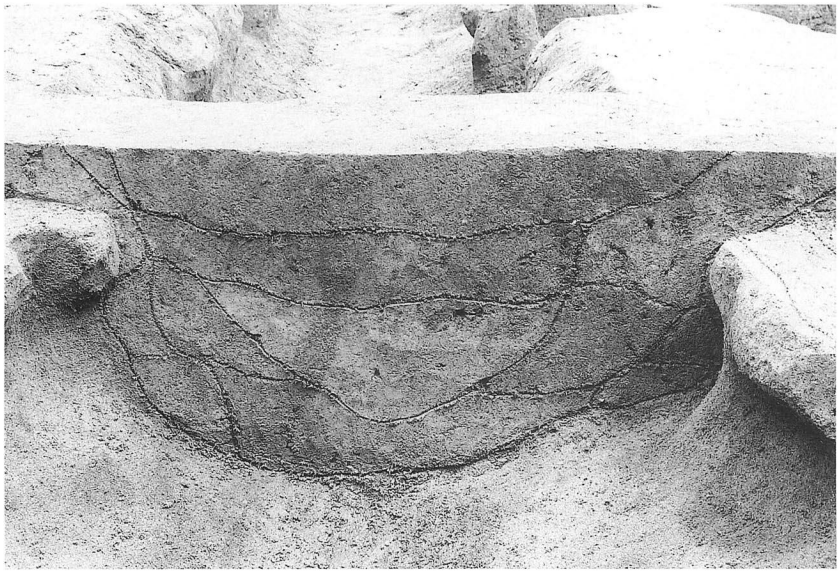
SD01、02



SD03（北から）

SD04（南から）

黒色土落ち込み（北から）



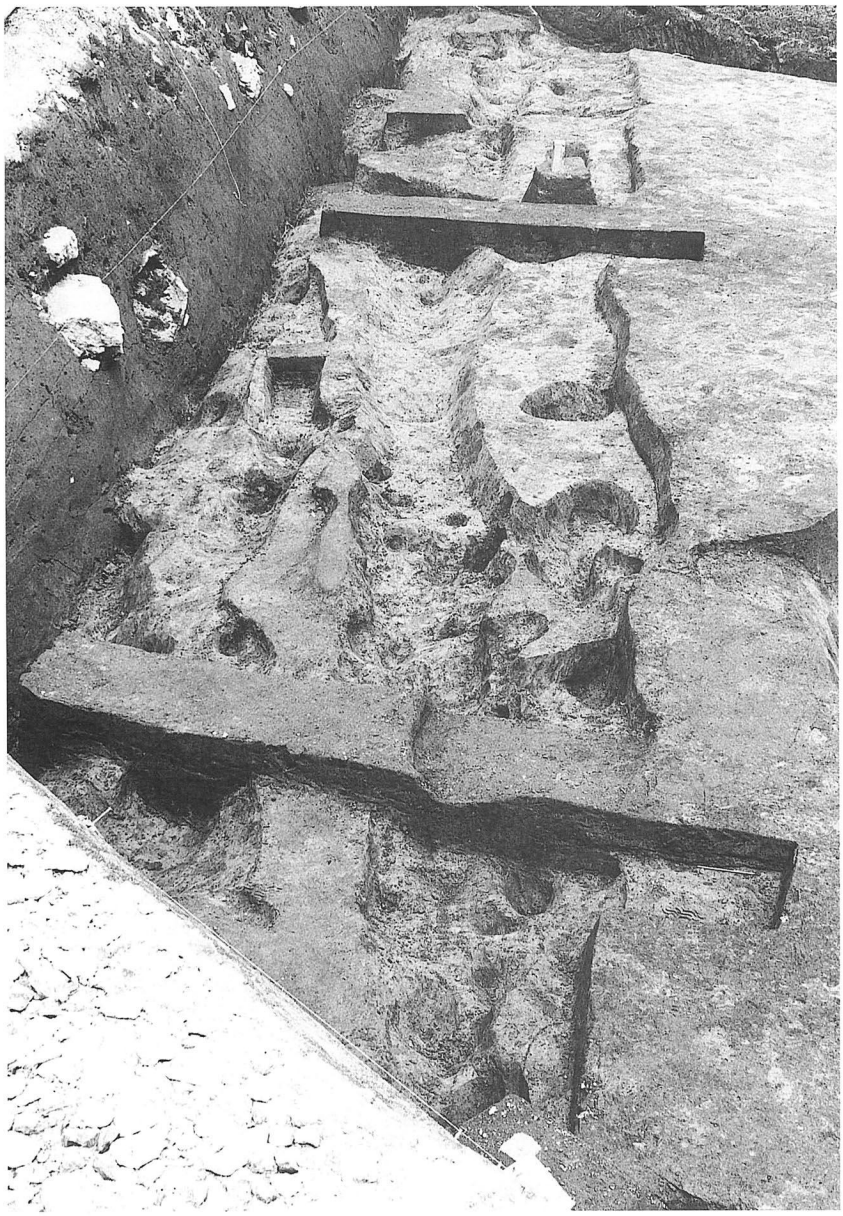
SD04　土層

SD05、06（南から）

図版 12

4Grより北調査状況

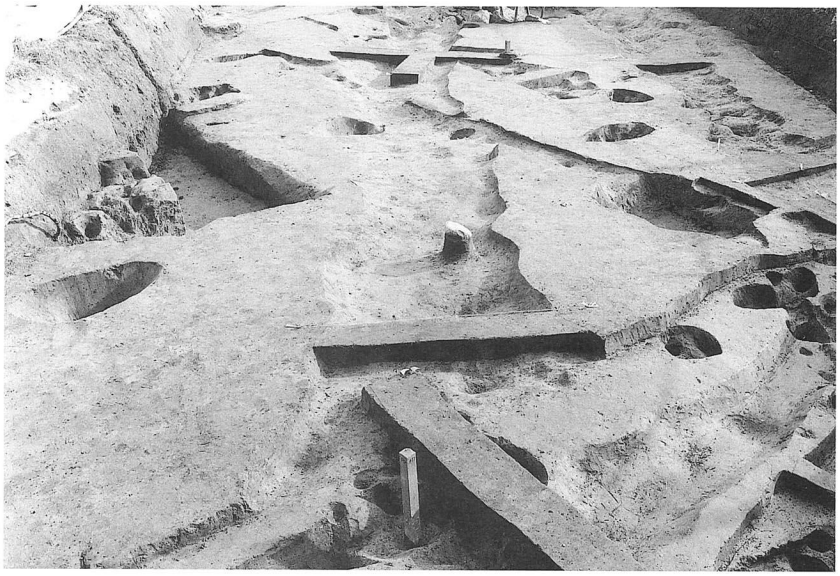
SD08、09（南から）



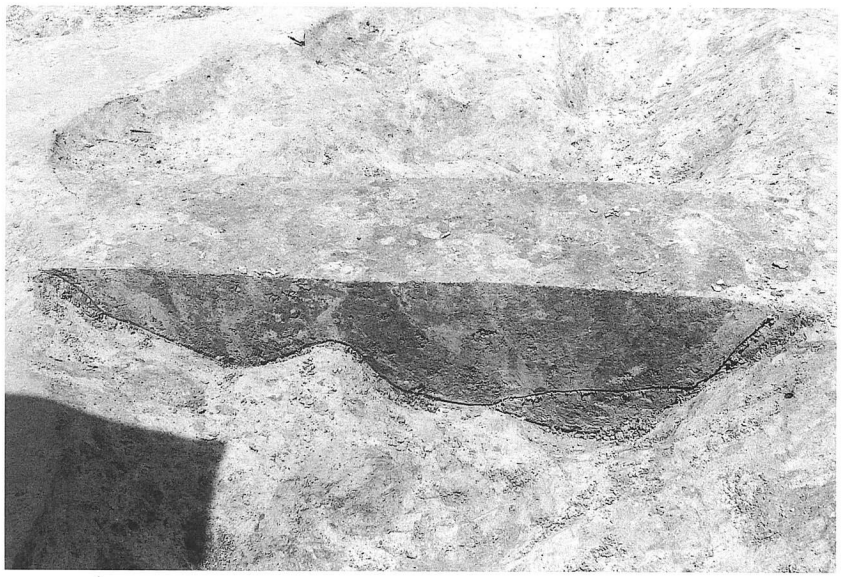
SD18、19（西から）

SD08、09、11（西から）

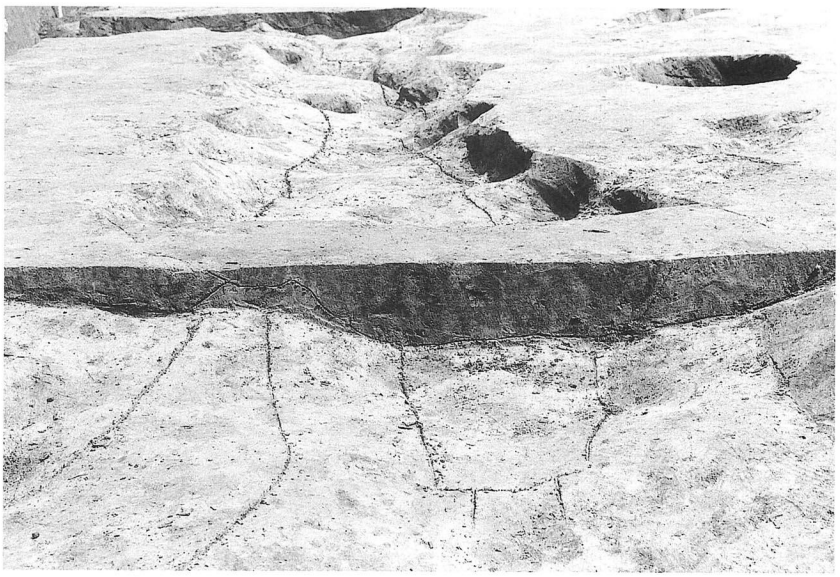
図版 14



SD12（北から）

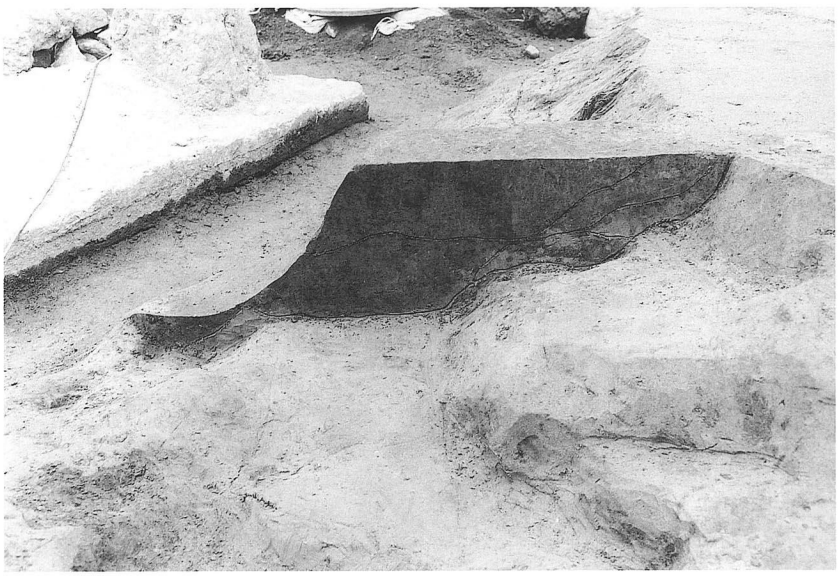


SD12土層



SD13土層

SD15検出状況



SD15土層

SD15（東から）

SD23検出状況（南から）

SD23調査状況

SD23遺物出土状況

SD23遺物出土状況